雷の覇者

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雷の覇者

【Ｎコード】
Ｎ２９６８Ｊ

【作者名】
悠久

【あらすじ】
かつて起こった人魔大戦。
それを終結させた７人の英雄、七聖。彼らは多大な犠牲の末、世界を２つに別ける。
人間の世界の現界、悪魔の世界の魔界。
物語はその戦争から長い時を置いた現代。
最年少で今代の七聖になった少年の物語。
今、世界が大きく動き出す……

※この物語は、作者が書く雷の覇者の再構成ものになります。

用語説明（前書き）

用語説明です。
本編で出てきた用語を説明しています。
順次追加予定。

この用語が分からない、というようなものがあれば報告ください。

用語説明

○魔導協会

魔導士が所属する協会。世界中の魔導士を管理する団体。一般人や軍、国からの依頼を受け、魔導士を派遣することもある。各国に支部があり、本部は日本に存在する。

○七聖

かつて世界を救った七人に敬意を払いつけられた称号。現在は魔導士のトップにつけられている。その素性は一般には不明であり、彼らの二つ名と、彼らが使う神具という特別な魔導媒体のみが知れ渡っている。

神風……神具「双神剣シルフィード」
獄炎……神具「絶手脚甲陽炎」
水鏡……神具「聖杖アルテミス」
無影……神具「魔鎌ハルペー」
荊姫……神具「滅槍ベリウス」
金剛……神具「守護盾アイギス」
瞬雷……神具「霊刀千雷」

七聖には独立捜査権限があり、任務を受けることもあるが、ある程度自分の判断で行動できる。現地の魔導士の協力などを要請することもできる。

○境界点

魔界と現界とのバランスと保つ封印術式がある地点のこと。かつて起こった人魔大戦、その際、初代七聖が魔界と現界を別つために世界に5つ大規模封印術式を残した。それが境界点であり、アメリ

カ、イギリス、ロシア、南極、そして日本に存在する。正確な場所は一般には隠されている。

○魔導士

魔導を使う者の総称。実力によりランク分けされる。F、D、C、B、A、AA、AAA、S、SS、SSSに分けられる。一般的な魔導士はC、B付近のランクである。

○名持ち

魔導師の中でも優秀な者に与えられる二つ名、それを持つ魔導師の総称。二つ名を持つ魔導師は大抵がSランク以上の使い手である。ちなみに響の昔の二つ名は「雷牙」である。

○魔導

魔力を、術式を通して様々な形へと変換させる術の総称。術式を魔法陣の形で表わし、そこに魔力を通すことにより魔導が使える。

魔導は習得難度や威力、効果により、いくつかの段階に分けられる。基本魔導、初級魔導、中級魔導、上級魔導、最上級魔導である。これらの魔導は術者の努力、才能次第で誰でも使用可能であり全体を一般魔導と呼ぶ。

その他にも特殊なものとして、固有魔導、などの習得者が限られてしまう魔導も存在する。

もともとは対悪魔として作られたものであり、現在では様々なところで魔導の力が使われている。

○固有魔導

術者個人のオリジナル魔導である。基本的には自分しか使えない。希に、魔力の質などが似た人に限り扱うことができることがある。響の「白雷」や灯の「罪裁く断罪の焔」がこれに当たる。

○術式
　魔導を使うための公式のようなもの。魔法陣の形で現れる。一般魔導は使う人間を選ばないが、特殊魔導は使う人間を選び、ある術者では意味の無い術式でも、ある術者では非常に強力な術式になることもある。

○魔導媒体
　魔導を発動する手助けをする物。一般的に武器の形をしており、武器としての使い方もある。魔導媒体を持たない魔導士は、術式を含んだ魔法陣を書かなくては魔導を使えないが、魔導媒体は術者のイメージした術式を瞬時に魔法陣に変換、空中や足元に描く。これにより、魔導の発動速度が格段に上がる。実践では必需品となっている。普段はアクセサリーなどに変形している。

○属性
　魔導師には、それぞれ得意な属性がある。基本属性は、火、水、土、風、雷、の5種類。基本属性は、得意属性以外でも、努力しだいで使うことは可能。ただし、高位の魔導になると習得は厳しい。
　基本属性以外にも、特殊属性がある。特殊属性は持って生まれた才能しだいで、後天的に習得することは滅多にない。例として、光、闇、木などがある。

○妖魔
　人間の負の感情が、魔界からの瘴気よって実態を持った者。人間の瘴気を基にしているので、その姿は人間の形に似る。全身黒一色で3メートルくらいの大きさがある。

○闇協会
　正式名称、行動理由、規模などほとんどが不明。闇協会は便宜上、仮につけられた名前である。優秀な子どもをさらい強制的に魔導を

仕込んだり、各地で犯罪行為を行ったりしている。

プロローグ（前書き）

皆さん初めまして、作者の悠久です。
まだまだ拙い表現、文章が多くあると思いますが、よろしくお願いします。

プロローグ

ズガンッ

切り立った大地に雷の槍が突き刺さる。その先端には串刺しになった黒い異形。それは言葉にはならない雄叫びをあげて動きを止める。それと同時に槍も霧散した。

1体の異形の死体。否、よく見ると周りには無数の、それと同じ物体が転がっている。串刺し、焼死、斬殺、撲殺、溶解、中には死体すら残らないものもいたのだろう。障害物がなく見渡せる空間に、それらは広がっていた。

「あいつらは何とかやったようだな」

「ええ、そうみたいね」

見渡す限りの岩場、植物などない。空は黒ずんでおり光など数えるくらいしか存在しない空間。無数の異形の死体の中心、そこに2人の男女がいた。その2人の背後には歪んで、まさに閉じようとしている見慣れた世界。2人は閉じゆく世界の未来を思い浮かべつつも、信頼のおける仲間たちに任せることを決意する。自分たちのやるべきことは他にある。

「これで未来は繋がった。俺達の役目も、もうすぐ終わる。すまないな、こんな終わり方で」

男は肩の荷が下りたかの様な清々しい表情で言う。しかし、その体は違う。全身に無数の切り傷を負い、背中には致命傷になっても

おかしくない3本の爪痕。右手にいたっては付け根からなくなっている。それだけの傷を負いながら左手に自らの武器である刀を持って立つ姿は、万人の理解を超えた存在と言えるだろう。

「生き残った魔導士の避難はすべて完了。これで戦争も終わる。あなたと一緒なら、こんな終わり方も悪くないわ」

対する女も全身に傷を負っている。男ほどでないにしても、もはや闘える余裕などないように思える。だがしかし、右手のレイピアを握りしめ闘う姿勢を崩さない。自分たちの最後の役目、時間稼ぎが終わるまでは……

その時、視界の片隅で黒が蠢く。それらはどんどん増殖し、視界を埋め尽くすほどになった。それらが2人めがけて、否、背後の閉じゆく世界をめがけて押し寄せる。

「来たな。最後の仕上げだ。もう何も言わない、最後まで俺について来てくれるか？」

「当然よ。アナタこそ、私についてきなさい」

おそらく最後になるだろう言葉を交わし、2人は再び戦闘態勢に入る。瞬間、男からは雷、女からは風が吹き荒れる。それらは2人の周りで混じり合い相乗効果を生み出す。どんどん強く、早く、敵を殲滅せんと威力を増していく雷と風。

それは嵐。

風で薙ぎ払い、切り裂かれ、雷で焼かれ、塵と化す。人智を超えた力の行使。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そのまま2人は異形の軍勢に突進を仕掛ける。その背後では見慣れた世界が姿を消したところだった。

大昔、人間と悪魔がいた

悪魔は巨大な力を持ち、人間を排除しようと動く

人魔戦争のはじまりである

力のない人間はそれに対抗するために力を生みだした

魔導

戦争の中で磨かれていった魔導はいつしか悪魔と渡り合う程の力をもたらし、魔導協会が設立される

しかし戦況は人間が不利

そんな時、魔導を極めし7人が立ち上がる

7人は1人1人が悪魔の軍勢と渡り合う程の使い手であった

しかし所詮は個人の力、全体を守るのは難しかった

そこで7人はある手段を用いる

悪魔を魔界に人間を現界へと別ける大魔導

それを見過ごすほど悪魔も愚かではない、全軍での攻勢に打って出る

大魔導を5人で、残り2人と多くの魔導士は命をかけて5人を守った

こうして大魔導は成功する

2人の犠牲と引き換えに

後にこの7人は尊敬の念を込め七聖と呼ばれる

そして現在、魔導協会の最高位の魔導士に称号として与えられる

今代の七聖は

「神風」「獄炎」「水鏡」「金剛」「茨姫」「無影」

そして「瞬雷」

これは最年少にして七聖の一人となった少年が紡ぐ物語。

待っているのは安穏とした世界か、はたまた狂気と混沌にあふれた地獄か

世界の行く末は、未だ分からない

プロローグ（後書き）

まだまだプロローグですが頑張っていきたいと思います。

作者は就職活動や卒論があるので更新は遅くなると思いますが、頑張っていきたいと思います。

第1話：任務

「何でこんなことになったんだか」

一人の少年疑問を口に出して言う。その言葉は気だるそうで、やる気がまったく感じられない。

「俺の予定では後1周間は惰眠をむさぼっているはずだったんだが……」

心底残念そうに言った少年は両手いっぱいに持った荷物を、まだ誰も使った形跡がない玄関に置く。玄関から見える廊下には届いたばかりの荷物が入った段ボールが並べられていた。

「過ぎたことを言っていても仕方ありませんよ」

鈴のような声の少女が言う。脱いだ靴を整えながら少年に対し今後の予定を確認する。

「とりあえず、明日は学園に編入するわけですから、今日はもうご飯を食べて早めに寝ましょう」

「んで、その飯は誰が作るんだ？」

「私が作っていいんですか？」

少女は満面の笑みで少年を見る。その眼は悪戯をする前の子供のように輝いている。少女の家事能力を知っている少年は深いため息を吐く。やる気のなかった表情が、さらに増したように感じた。

「だよなぁ～。お前に家事は任せられないよなぁ、はぁ～」

もう一度深いため息を吐き、少女の申し出を断りながら、少年は調理道具が入っているはず段ボールを開け、キッチンへと向かって行った。

頭の中で何故このようなことになったのかを思い浮かべながら……

約１０時間前……

ここは魔導協会の中でも極一部の限られた者が入ることを許されたところ。魔導協会本部の地下に造られた施設である。ここの存在を知っている者でさえ、指揮官クラス以上の魔導士である。

そこに、

カツン、カツン、カツン

左右の壁に付いている蝋燭だけが光源の薄暗い通路に、２つの足音が響きわたる。足音は重なっており、注意して聞かないと２人とは判別できない。徐々に足音が近づいてきて、蝋燭の明かりで顔が判別できるようになった。そこには１組の少年少女が無言で歩いていた。

そのうち一人は、まだ少年とも言える顔立ちの男。しかしその眼には迷いがなく力強い意志が感じられる。

もう一人は少女。身長は男の肩位で、ツインテールに縛った髪に、白いリボンが特徴である。どことなく雰囲気が男と似たところがある。

「兄さん、今度の任務って何なんだろうね？」

そこで沈黙と薄暗さに耐えられなかったのだろう、若干の緊張を、その声音に乗せながら少女が男に声をかけた。どうやら二人は兄弟だったらしい。尋ねられた兄は頭を手で掻きながら答える。

「さぁな。姉さんからの呼び出しだから、あまり良い予感はしないな。俺としては前回の任務の疲れもあるし、もうちょっと寝て過ごしたかったけどな」

「もう、そんなこと言ってここ1週間ほとんど寝て過ごしてませんでしたっけ？」

ジロッと横目で兄を睨む。それに対し兄は全くの無視。まるで気にしていないかの様に返事を返す。欠伸をしているあたり、兄の神経の太さがうかがえる。

「それだけ疲れてたってことだよ。それにな心。寝る子は育つんんだぞ。お前ももう少し寝ろ。そうすれば毎日毎日風呂上りにやっている特定部位が大きくなるマッサージもやらなくて済むんじゃないか？」

「特定部位って・・・／／／／っ！　兄さん！！　そこは関係ないでしょ！　っていうか何でそのことを知っているんですか！？」

心と呼ばれた少女は自分の胸の前で腕を組み、少し後ずさりなが

ら兄に問いただす。その目は実の兄を見る目ではなかったが。

「そりゃお前、愛する妹のことなら悩みから黒子の数まで何でも知ってるぞ。ハッハッハー」

「ハッハッハーじゃないですよ。そんな事ある訳ないじゃ『最近の我が妹の体脂肪率が大台の……』！！　ワーワーワー／／／　分かりました、分かりましたからー。それ以上は言わないでくださーい。うう、兄さんの意地悪」

涙目になりながら兄の言葉を止める心。どこでそんな情報を手に入れるのか、心底疑問に感じながらも、この兄なら何でもできるような気がしてしまい結局お手上げするしかない。

「まだまだだな、我が妹よ。」

言いながら満足そうにほほ笑む兄に心は批判気に視線を送りながら、さらに一歩距離をとる。

話しているうちに目的の部屋の前まで来たらしい。2人の前には身長の2倍はありそうな扉が立っていた。少し昔のデザインで木製の頑丈そうな扉である。少し押すと以外に軽く扉が開く。そのまま一気に扉を開け中に入る二人。

っとそこに、

「相変わらず仲が良いな、お前たちは」

赤いまるで灼熱を思わせるような髪をなびかせながら、長身の女性が近付いてきた。

スラっと伸びる足に出るところは出る、引っ込むところは引っ込む、世の女性の憧れのようなプロポーションをした女性は、その兄弟を待っていたのか壁に背中を預け、腕組みをしながらこちらを見ている。

「姉さん！！」
「お姉ちゃん」

兄弟は二人同時に声をあげた。

「こーら、響、心。ここではその呼び方はダメだって言わなかった？」

ニカっと太陽のような笑みを浮かべながら、女性は言った。なだめるような言い方には2人への思いやりが含まれているような気がする。

「あっと！　七聖『瞬雷』神楽坂　響　只今出頭しました、副隊長」

「同じく、その補佐、『風精』神楽坂　心　只今出頭しました」

副隊長。そう、この女性が七聖の副隊長にしてその一人「獄炎」の紅灯（くれないあかり）である。

「御苦労。今日ここにお前たちを呼び出したのは他でもない、お前たちには任務に就いてもらう」

話し方が変わる灯。それを受け、響と心の2人の雰囲気が変化する。張りつめたような緊張感が生まれる。

「はい、それは聞いています。ところでその任務内容は何なんですか？」

「今回の任務は少々特殊でな。潜入及び防衛任務になる。そのため割と長期になってしまうがな」

「潜入と防衛……ですか？　しかも七聖がでるような。それなら末席の私たちよりも『金剛』様や『荊姫』様に任せたほうがよろしくないでしょうか？」

任務の内容を聞き、思った疑問を口にする。

「うむ、無論他の七聖も出向く予定である。しかし今回の任務は防衛場所が複数ある。境界点は知っているな。今回の任地はその境界点である藤歌学園になる。他の七聖もそれぞれ境界点へと向かってもらう」

境界点。それは魔界と現界とのバランスと保つ封印術式がある地点のことである。かつて起こった人魔大戦、その際、初代七聖が魔界と現界を別つために世界に５つ大規模封印術式を残した。それが境界点であり、アメリカ、イギリス、ロシア、南極、そして日本に存在する。正確な場所までは公にされていない最重要機密なはずだが……

「藤歌学園って親父「ギロッ」一心さんが学園長をしている、日本最大の魔導士育成学園ですか？」

途中「獄炎」に睨まれ、言い直しながら尋ねる響。

「そうだ。その境界点に今回「闇協会」が何らかのアプローチがある可能性があることが判明した」

「闇協会ですか！？」

闇協会とは、魔法を悪用する魔法犯罪者や強力な魔力を持つ子供を誘拐し、勢力を伸ばしている組織である。その大義や活動場所などあらゆる情報が一切不明で、魔導協会が前々から追っている組織である。闇協会という名前も魔導教会が勝手につけた名前である。

「『無影』からの報告、さらには『水鏡』の占いにも似たような暗示が出ていた。そこで、お前たちを生徒としてその学園に送り込み、秘密裏に境界点の防衛及び闇協会の排除をお願いしたい。一応、教師として送り込むことも考えたんだが、自由に動けないだろう。そこで適任だったのがお前たち兄弟だったわけだ。ちなみにこれは隊長である『神風』との協議の結果であり、お前たち特に響には拒否権はない」

「強制ですか！？　……分かりました、七聖が瞬雷、その任謹んで拝命いたします」

「同じくその補佐、風精、謹んで拝命します」

少し考えた後、なかば諦めた表情で承諾する響を横目に苦笑しながら、心も承諾した。

「そうか、そうか。お前たちなら引き受けてくれると思っていたよ。任務中は正体隠蔽のために響には3重の、心には2重のリミッターがつくからそのつもりで。住居はこちらで手配済みだから、そこで二人で住んでくれ。あと任務は明日からだからすぐに準備して現地

に向かってくれ。そのほかの細かいところは書類に目を通しておけ」

「「は？？」」

「強制したくせに・・・」とか心の中で考えつつも口には出さずに任務の概要を聞いていた2人は、同時に素っ頓狂な声をあげる。

リミッターをかけるのは当然である。七聖の正体はできるだけ隠蔽される物である。そのため、無意識に強大な力を使うのを防ぐためにリミッターが必要なのである。一般の魔導士は七聖の正体は知らない。ただ彼らが扱う特別な魔導媒体だけを知っており、誰がその使い手なのかは知らないのである。よほど緊急の場合のみ七聖は自らの正体を明かし現地の魔導士の指揮権を得るのである。ゆえに、彼らが驚いたのはリミッターのせいではない。

ちなみに魔導媒体とは魔導を発動する助けになるためのもので、一般的には武器の形をしている。なくても魔導は使えるが、発動速度、制度、威力が低下する。

「明日からですか！？」

流石の心でも困惑した表情で尋ねる。それも当然、明日から引っ越せと言われても準備の時間などに余裕がないのだから。

「そうだが？」

ニヤニヤしながら返答する美女。明らかな確信犯。2人の反応を見て、内心で楽しんでいるのだろう。

「急すぎるだろ！オイ！？」

「事態は一刻を争うかも知れんだろ」

「親父がいるじゃねーか。ふっざけんじゃねーー！！」

その後言い争いになった姉と兄を止めるに止められなかった妹は、最終的には炎のともった拳（比ゆではない）を顔面にくらって気絶した兄を引きずって任務の準備をした。

その後目を覚ました兄と共に任地に、これから過ごす住居へとたどり着き冒頭に戻る。

第1話：任務（後書き）

第1話です。前の小説に比べると、設定やら世界観が変わっています。この後も随時更新していく予定です。

第2話：初登校（前書き）

今は昔の小説の手直しだから更新早いなぁ

第2話：初登校

次の日の朝。

PiPiPiPi・・・PiPiPiPiPi・・・PiPiPiPiPi・・・PiPiPガチャ！！

「・・・ふあああぁぁぁぁ」

目覚ましが鳴る音で目を覚ました響は欠伸を一つして布団から出た。結局あれから簡単な料理を作り二人で食べ、届いた荷物を少し片付けてから寝たのは日付が変わった頃だった。

彼、神楽坂　響の朝は早い。

現在朝の5時。普通の高校生ならまだ寝ている時間帯である。しかし、彼にはこれから重要な任務が待っている。

それは・・・

「今日の朝飯は何作ろう・・・」

そう、朝食作りである。

まだ眠い目を擦りながら布団から起きだす。全身で伸びをし、体を動かし眠気を取ろうとするが、睡眠時間が足りないのか一向に眠気は覚めなかった。

しょうがなくそのまま、まだダンボールに入りっぱなしの新品の制服を取り出し着替えることにした。まだ誰も袖を通したことのない制服は生地が硬く着づらい。

ようやく着替え終わった響は軽く洗面した後、キッチンに向かい冷蔵庫の中を確認した。

「卵にチーズ、ケチャップとバターっと。あとはパンがあったかな？」

昨日、ここに来る前に買い込んだ食材を思い出しながら言い、冷蔵庫から取り出す。

そこからの行動は早かった。手早く卵をボールに割り、砂糖と塩で味付けし、暖めておいたフライパンで焼いていく。焦げ目がついたところで裏返し火を止めて余熱で焼いていく。その手際からは慣れが窺える。

さらに、パンの上にバターをぬり、その上にケチャップをぬる。そこにチーズを載せてトースターで焼こうとした時、

「おはよぅ、兄さん」

パジャマ姿の妹が声をかけてきた。

「相変わらず、ちょうどよく起きてくるな。もうすぐで飯できるから、さっさと顔洗ってこい。」

妹の心は朝が苦手なのだ。しかし、毎朝起こさなくても朝食ができそうになると勝手に起きてくるから不思議である。「ふぁ～い」というまだ半分寝ているような緩い声を背中で聞きながら、先ほどのパンをトースターで焼いた。

「ごっちそうさまでしたぁ～、兄さん早く学校行こーよー」

えらく上機嫌な心が言う。先ほどまでの眠気はどこへいったやら。はしゃぐその姿はいつもの心からは予想できないであろう。

「なんでそんなに楽しそうなんだ？」

「だってだって、学校だよ～？私たち勉強は昔からお姉ちゃんと修行ばっかりだったし、勉強はお父さんに教わってたから必要なかったし。学校なんて行ったことなかったじゃん」

「だから一回学校行ってみたかったんだよ」っと言う妹を見て響は考えていた。

（姉さんはそのことも考えて俺たちにこの任務を与えてくれたのかもな）

普段はあまりやさしい一面を見せない姉を思い浮かべながら苦笑する。彼らの姉は厳しさはあるものの、それはすべてが彼らを思ってのことである。それを分かっているからこそ、２人も今まで文句を言いながらも修行や勉強を続けてきたのだ。

「どうしたの兄さん？」

「なんでもねぇよ。そんじゃ行くか！　忘れ物するんじゃねぇぞ」

「そんなに子供扱いしないでよ！大丈夫。持ち物は昨日のうちに確認したから」

っと頬を膨らませながら言う妹を見ながら、ニヤニヤする兄響。

「な、なによぅ」

そんな兄の様子を怪訝に思った妹は兄を睨む。響がこんな笑みを浮かべるときは大抵が自分に損な結果に繋がってくるのだ。心にとっては警戒しておくべきである。

しかし、そんな妹の考えを分かっているのか、いつも通りの表情に戻り、警戒の視線をスルーしつつ

「そんじゃ行くぞ〜」

と言い玄関に向かう響。内心では悪魔のような笑みを浮かべながら。

「ま、待ってよ、兄さん」

そこで、あわててついてくる心。置いて行かれるのではと表情にこそ出さないが内心では焦っている。しかし、彼女が気にするのはもっと別のことだった。

響は玄関で靴を履いたところで、再び悪戯をする前のような笑みを浮かべ振り返る。今度はもう隠す気がないらしい。心は怪訝に思うが、今気づいたとしてももう遅い。

妹のリアクションを楽しみにしながら彼は、

「ところでよ〜、我が妹よ。その格好で学園に行くつもりか〜？ニヤニヤ」

「・・・ッツ！？」

爆弾を投下した。

「いい加減、機嫌直せよ、心。俺はちゃんと指摘してやっただけだろ」

「いやです。兄さんは最初から気づいていました。何であのタイミングで指摘するんですか？」

「そりゃお前。その方が面白いからだろう♪」

すがすがしい位の笑顔を浮かべて言う。

「やっぱり・・・はぁ」

諦めた表情で溜息をつく心。兄の悪戯は今に始まったことではない。長年の経験から心は兄がドSであることを確信していた。

まぁ、これを響に言ったものなら、さらに弄られるだろうが。そんな兄を今まで嫌いになれない自分は実はMなのではないか。そんな疑問まで浮かんでしまう。

そんな考えを心がしてるうちに二人はあるドアの前に着いていた。

ここは藤歌学園の学園長室に続く廊下である。豪華な造りの校舎

に驚いた二人だが、中は意外にも普通の学校という感じだ。
これから彼らは学園長であり、元七聖「斬鉄」であり、彼らの義理の父親である黒金（くろがね）　一心（いっしん）に挨拶に行くところである。

コンコン

「入りなさい」

響がノックすると中から威厳を漂わせる声で入室を許可された。

「「失礼します」」

そう言って中に入った二人の前には、大柄でがたいのよい６０歳くらいの男性が机をはさんで反対側の椅子に腰かけている。頭は丸坊主で、お寺の住職のような格好をしている。首からは大きな数珠をぶら下げており、それが余計に威圧感を増しているようだ。

「久しいの、二人とも」

「親父も久しぶりだな。元気そうで残念だ」

「こらっ、兄さん」

「ほぉっほぉっほぉ、そういうお前も元気そうだな、馬鹿息子よ。」

「おかげさまで」

お互いに家族に向けるものとは思えない皮肉を言う。心にとっては心労が増えたような気がする。子は親に似ると言うが、それは義理の親子の関係でも成り立つのだろうか。

一通り挨拶？　を済ませたのか、さっそく本題に移る。

「本日付けでお前たちを我が藤歌学園の生徒として編入する。任務内容は聞いておろう？」

「「はい」」

先ほどとはうって変って、お互い真剣な表情で話し始める。気を引き締める時は締める。それは姉の教えであり、魔導士として任務につくからには最低限必要なことである。

「相手の動きは全く掴めておらん。相変わらず訳の分らん奴らじゃ。お前たちにはその調査も含めて今回の任務に当たって欲しい」

「「了解しました」」

「うむ、さっそくだが、お前さんらのクラスを言っておく。響は２－Ａ、心は１－Ａじゃ。さらに２人には学園の風紀委員に参加してもらう」

「風紀委員ですか？」

委員会に入ってどうするのか、心の疑問は当然のものだ。自分たちの行動の幅を狭められれば、それだけ任務の邪魔になる。

「そうだ。風紀委員は学園内での魔法使用が認められておるし、ある程度の学校の権限も使える」

「任務の遂行がしやすくなるわけか」

「そうじゃ。風紀委員内では基本5人1組で班を作っているから、お前さんらの他にあと3人組んでもらうことになる。3人とも我が学園を代表する実力者じゃ」

「わかりました」

一心の説明に納得した2人は頷き、了解を示す。

「その他にも、その5人で学外の依頼もこなすことになると思うから、仲良くするのじゃぞ」

「はい」

続いて心が答える。この藤歌学園は魔導協会に集まる一般の依頼の中でも難易度が低いものを生徒に経験を積ませる名目で、生徒が依頼をこなすことがあるのだ。

「その3人には事前に伝えてある。2人は響と同じクラスで、1人は心と同じクラスじゃ。まぁ、クラスに行けば分かるじゃろ。放課後には訓練場に集まるように。それでは各々健闘祈る」

「「了解」」

二人同時に頷き退出した。

退出した2人はそのまま職員室に行き、担任の先生に挨拶をして、職員室を出るところだ。初めての職員室だが、自分たちの立場上、今までにも目上の人たちに接する機会が多くあった二人は、さほど緊張することのなく挨拶することができた。

「いよいよですね、兄さん。」

「ああ、そうだな。なるようになるさ。じゃ、また放課後にな」

「はい、それでは」

2人はそれぞれ自分の担任に連れられて教室に向かった。

第3話：友との出会い（前書き）

ようやく3話。
まだしばらくは更新スピードは早いです。

第3話：友との出会い

２－Ａ教室

私の名前は真田（さなだ）　理沙（りさ）今日は学園長から聞いていた転校生が来る日。はたしてどんな奴が来るのやら。まともな奴であって欲しいと願っている。

そこに

「理沙っち、理沙っち！　今日ね、今日ね、このクラスに転校生が来るんだってさ～！　ねぇねぇ聞いてるぅ～？」

彼女の名前は橋本（はしもと）　薫（かおる）。噂とかニュースが大好きな女の子である。ボーイッシュなショートカットの髪型がよく似合う活発な子である。入学当時からの付き合いで、まだ1年ちょっとしか一緒にいないが、それでも親友と呼べる仲である。

「はい、はい聞いてるから！　少しは落ち着きなさい、薫。転校生のことは学園長から聞いてるわよ。なんでも風紀委員に入って私と同じ班になるみたいね」

と、腰まで届くかという長さの自慢の赤い髪をいじりながら椅子に座って私は言った。この髪は私の自慢の一つで、私の憧れの人に似せて伸ばしたのである。

「え？理沙っちと同じ班ってことは、努っちと棗っちとも同じ班ってこと？　これで４人になったね。あれ？　風紀委員って５人で１班じゃなかったっけ？」

「妹も一緒に転校してきて、風紀委員に入るみたいよ。だからこれで5人」

「なるほど～。これで理沙っちの班も本格始動ってわけだ」

「そうね。先月から私たちだけ3人で組まされてたのは転校生のためだったみたいね」

「でも、理沙っちたちは優秀だから3人でも十分だったんじゃない？」

「そんなことないわよ。約1名体力バカがいるせいで、私たち2人が迷惑してるんだから」

私は同じ班の一人を思い浮かべながらため息を吐く。ホントにあいつの相手は疲れるのだ。

「アハハ、大変だね。そういえば、その努っちは今日はどうしたの？」

「あいつのことだからどうせ「はい、みんな席に着いてね～」って先生来たみたいよ」

「そうだね。じゃあまた後で」

そう言って薫は駆け足で席に戻って行った。教壇には担任の教師が出席簿を持って立っている。転校生が一緒じゃないところを見ると、廊下で待たされているのだろう。

せめてまともな思考の持ち主であってほしい。私はこの時そんな

ことを考えていた。

「はい、じゃあホームルームを始める前に、今日は転校生を紹介をしたいと思います。じゃあ、神楽坂君入ってきて～」

先生の言葉に耳を傾けつつ、転校生のことを考えていた私は、思考を中断して前の教卓の方へと意識を向けた。

2－A前廊下

「今のところ特に怪しい気配はないか……しかし、流石は日本最大の魔導士育成機関だな。なかなか大きな魔力をもった人が多いな。リミッターをかけているとはいえ、今の俺達と同じ位か」

先生に「呼ばれたら入って来てね」っと言われ廊下に一人待たされていた響は、魔力探査の術式を誰にも気づかせずに展開し周囲を調べていた。この手の探査魔法は勘のいい人なら気付かれるのだが、誰にも気づかせない辺り響の実力と経験が窺える。

そして、年齢の割には大きな魔力反応に一人で関心の声を洩らす。よほど才能のある学生を集めたらしい。将来はこの中から七聖クラスの魔導士が出てもおかしくはない。

「こういう探査系の魔導は心の方が得意なんだけどな……」

そんなことを考えていたその時、「・・・思います。じゃあ、神楽坂君入ってきて～」っという声がきこえた。

「よっしゃ、それじゃ行きますか」

一人で気合を入れ直し、教室のドアを開けて中へと足を進めた。

2－A教室

黒板の前まで進んだ響は教室を見まわして、改めて自分が学校に来たことを実感していた。生徒の視線が自分一人に集まる。今までも経験してきたが、その経験のどれにもあてはまらなかった。

「じゃあ神楽坂君、自己紹介をお願いします」

とある程度響の簡単な紹介を終えた先生が笑顔で言ってきた。響は「はい」っと返事をして一歩前へ出る。

そして

「ただいま紹介されましたが、俺の名前は「バコンッ」……」

突然の物音に自己紹介が中断される。静かだった教室の一番後ろのドアが思いきり開かれたのだ。

そこには「ふぅ、ぎりぎりセーフ」などと言って、額の汗を拭いているツンツンヘアーの男が立っていた。制服の上着を手に持ち鞄は投げ捨てられ、膝に手をつきながら荒い息を整えている。今まできっと走っていたのであろう。

「なーにが『ぎりぎりセーフ』なのかな？　黒沢（くろさわ）　努（つとむ）君」

とびきりの笑顔をしている先生。先ほど響に向けた笑顔とは全く違う笑顔。はっきり言って怖い。この先生は怒らせないようにしよう。響が心の中でそう決意したのもしょうがないことであろう。

「あっ、え～と・・」

その教師の笑顔を見て、怯える努。続く言葉が出てこないのか、返答を詰まらせている。今度は冷や汗をぬぐっくているようだ。

「今ちょうど転校生の紹介をしてたところなんだけど？」

「あっ、そうッス。転校生、転校生！　俺達と同じ班を組むって聞いてた転校生の紹介に間に合ったって意味ッスよ」

いかにもとってつけたかの様な理由である。クラス中の白い視線が努に突き刺さっているような気がする。クラスの反応を見るに、これがいつものことのようだ。

「ふ～ん。じゃあ、黒沢君は遅刻っと。あとで職員室に来るようにね！　わかったら席に着きなさい」

「あ～い、とほほ」

クラス中から苦笑が漏れているなか、響は（あいつと一緒の班になるのか？　大丈夫か？）などと考えていた。

さらにその中に頭を抱えてうつむいている赤い髪の少女がいたこ

とはご愛敬である。

その後無事に自己紹介・ホームルームも終了し、響は今クラスメートに囲まれていた。転校生恒例の質問タイムである。次々と質問されているが、流石の響きでも聖徳太子ではないため質問内容が把握できないでいた。そこに

「はいはい、そんないっぺんに質問しても響っちが答えられないよ。ここはクラスを代表して、私こと橋本　薫が質問しちゃうよ」

薫が名乗り出て、なんとかその場を収める。彼らも響が困っているのに気づいたのか、一歩引いて薫に質問を任せるようだ。響にとっても願ったり叶ったりで止めるようなことはしない。

「では、第一問。響っちはどこの学校から転校したきたの？」

「いや、訳あって学校には通っていなかったんだ。だから、転校というよりは編入だな。ちなみに訳は話せないぞ」

訳は機密事項なので話せない。もし話したりしたら響たちの素性が割れてしまう可能性もある。まぁ、今更魔導士学校に通う必要がないのも理由の一つだが。

「わかりましたですよ。続いて第2問、響っちには妹がいると聞いたのですがホントですか？」

「ああ、本当だ。１－Ａに今日編入している。名前は心だ。この教室にも顔を出すと思うが、仲良くしてやってくれ」

「心っちですか～。わかりました。続いて第「ちょっと待った！」はい？」

「その響っちとか心っちっていうのは何だ？」

先ほどからの薫の言葉づかいに疑問を覚えていた響は思い切って質問し返すことにした。今まで自分をそんの風に呼ぶ人間がいなかったので戸惑っていたらしい。

「なにって、愛情表現ですよ。私は友達には皆に「っち」をつけてるのですよ」

薫は当たり前のことのように返答する。その返答に響は周囲を見た。クラスメート「諦めろ！　それだけは直らん」っという表情を一瞬で読み取った響は「……そっか、好きに呼んでくれ」と潔く諦めた。響は無駄なことはしない主義である。

「じゃあ、ラスト。響っちって室内なのに左手だけ手袋してるよね？どうして？」

その質問はクラスメートのほとんどが気になっていたのか、皆しきりに頷いている。響にとってはあまり触れてほしくない話題なのだが、答えない訳にはいかないと判断、返答を返す。

「……昔にちょっと大きな火傷をしてな。あまり見せても良いもんじゃないから、普段から隠してるんだ」

火傷と響は言ったが、これは嘘である。他の人に必要以上に気を使われないための。隠し事をする罪悪感がないと言えば嘘になるが、

正直に言ったところでどうにかなるわけではない。

響の返答に薫は「それは変なこと聞いてゴメンなのですよぅ」と口調が落ち込んでいた。

「気にすんじゃねーよ。俺は気にしてねーし。気にするってんなら、これから友達としてよろしくしてくれ。それでチャラだ」

笑顔でそう答える響に薫も笑顔になり

「わかったのですよ～。これからよろしくです」

と言いながら二人は握手した。それで質問タイムがお開きになった。

質問タイムが終わり「ふぅ～」と一息をついていると「お疲れ様、響君」と後ろから声を掛けられた。

振り向いてみると、赤くて長い髪が特徴的な女の子と、ツンツン頭の遅刻してきた男がいた。

「おお、遅刻男だ」

「誰が遅刻男だ！！　俺の名前は黒沢　努。努でいいぞ、転校生」

響がつけたあだ名に本気で怒りながらも自己紹介する努。まだ体が熱いのか、制服の上着は脱いだままである。

「この馬鹿は放っておいて、私の名前は真田　理沙。理沙でいいわ、響君」

「馬鹿とはなんだ、馬鹿とは～」などという声が聞こえてくるが華麗にスルーし、

「俺は神楽坂　響だ。俺も響でいい。よろしく頼むよ、理沙」

微笑みながら挨拶をする。

「え、ええ、よろしく、響」

軽く頬を赤くしながら返事をする。

「さっそく本題に入るけど、響は風紀委員になるのよね？　私はあなたと同じ班になるわ。その挨拶ってわけ」

「ああ、学園長から聞いてるよ。そっか、理沙が同じ班か。改めてよろしく」

「ところで、もう一つ。おそらく嫌な情報があるけど聞いとく？」

「……だいたいさっきの騒動で想像はつくけど、一応」

「……あそこの馬鹿も同じ班になるわ」

理沙は教室の隅を指さす。そこにはさっきまで騒いでいたが無視され落ち込んだ努が床にのの字を書いていた。

「……」

「……」

終始無言の2人。そして

「お互い苦労するわね、これから。」

「まぁ、他4人でフォローしてくしかないな」

などと妙なところで共感した2人は硬く握手をするのだった。

昼休み

「へ～、じゃあ、響は妹さんと2人で暮らしてるんだな。うらやましいぜ。家なんか頑固親父と住んでるんだぜ、まったくもうちょっと華が欲しいよな」

その後説得により、なんとか機嫌を直した努と改めて自己紹介をして、努、理沙、薫の3人で昼食を食べていた。

「じゃあ、響っちのお弁当は心っちの手作りってわけだ。いやぁ～、愛されてるね、お兄さん」

響は手作り弁当を持参していた。ちなみに昨日の夜のうちに簡単なものを作って冷凍しておいたものである。

余談で、努と理沙は購買から買ってきたパンを、薫はお母さんが作った弁当を食べている。

「ん？　いや、これは俺が作ったものだが？」

弁当のおかずを口に運びながら答える響。その答えに目を開いて驚く一同。はっきり言って響の弁当は美味しそうなのである。普通は女の子が作ったと思われても仕方がない。

「響って料理できるの？」っと代表して理沙が聞くと、

「ああ。簡単なものは一通りできるし、難しいものもレシピ見たりしながらつくるぞ。心は料理がって言うより家事全般が壊滅的に才能がないからな」

「壊滅的ってどんなのよ？」

「掃除をすれば家具が壊れ、洗濯をすれば服が布に戻り、料理をすれば毒物を作る。模様替えをすれば引っ越しでもできるんじゃないか？　いや、模様替えは家事じゃないからセーフかな……ぶつぶつ」

などという響の言葉に3人の中の響の妹像がものすごいことになっていることに響は気が付いていない。理沙なんかは、厄介な人が増えるかもと考え顔を青くしている。

「ま、まぁ、今日の放課後になれば嫌でも見れるしな」

「そうね、それまでは考えないようにしましょ」

「報告待ってるのですよ」

3人は自分を納得させた。

キーンコーンカーンコーン

時は過ぎて放課後。ホームルームを終えた3人は訓練場へと向かっていった。

第3話：友との出会い（後書き）

次回はもう一人の班員が登場します。
明日か明後日には更新できるかと。

第４話：班員集合（前書き）

最後の班員登場。ぜひご覧あれ

第４話：班員集合

「来たようじゃの」

そう言って訓練場に入った響たちを出迎えたのは学園長である一心である。その傍らには心と心より少し小柄の女の子が立っていた。おそらく彼女が響の班の最後の一人だろう。青がかったショートカットの髪、それでいて同じショートカットの薫とは正反対に穏やかな印象を抱かせる。スカートの前で組まれた手や姿勢からも窺える。

「兄さん」

「待たせたな、心」

響は自分のことを呼びながらこちらに駆け寄ってくる心を出迎えてやる。心の機嫌が良いことから、クラスや友達にも馴染むことができたようである。内心では心配していた響も、妹の表情を見て密かに安堵していた。

「いえ、それより兄さん。そちらのお二人が？」

「ああ、同じ班を組むことになる、真田　理沙と黒沢　努だ。理沙、努こいつが俺の妹で心だ。よろしくしてやってくれ」

「神楽坂　心です。兄がお世話になってます。これからよろしくお願いします。真田先輩、黒沢先輩」

心が礼儀正しくお辞儀しながら自己紹介をする。そんな心の様子を見て、先程まで抱いていた妄想の心と現実とのギャップに目を見

開いて驚いた二人は、挨拶を返すのに間ができてしまった。

その不自然な間に疑問に思った心が首を傾げて考える。そんな表情を見て我に返った2人は咄嗟に挨拶を返す。

「あ、あなたが心ちゃん？聞いてた話のイメージとは大分違うのだけど。私は真田　理沙よ。理沙でいいわ」

「だよなぁ。まさかこんなに可愛い子だなんて……俺は黒沢　努だ。努でいいよ、心ちゃん」

理沙の返答に頷きながら努も自己紹介をした。2人の挨拶を聞いて、また兄が余計なことを言ったのかと心は当たりを付ける。

「わかりました、理沙先輩、努先輩。兄さんが私のことを何て言っていたのか気になりますけど」

挨拶を返す心だが、目線は兄響のことを射抜いていた。兄が自分を弄るのはいつものことだが、初めての学校、初めての先輩にいきなり悪いイメージを持たれるのは心外だ。

「事実しか言ってないぜ？　それより心、あっちの子を紹介してくれないか？」

そんの心の視線を慣れたもので、完全にスルーしながら話題を変える。目線で一心の隣にいる子を指す。

「あ！　そうでした。棗ちゃ～ん、こっちこっち。この子が姫咲（ひめさき）棗（なつめ）ちゃん。私達と同じ班になる子だよ」

急に自分の名前を呼ばれて慌てて駆け寄って来る棗。そんな棗に抱きつきながら、心は紹介した。抱きつかれた棗は困惑しながらも振り解いたりしない。心もそれが分かっているから抱きついているのだろう。

「えっと、えっと。姫咲　棗です。響先輩のお話は心ちゃんから聞いてます。これからよろしくお願いします」

礼儀正しくお辞儀をしながら自己紹介した。見た目だけでなく内面も穏やかな子らしい。

「うん、こちらこそよろしく。棗ちゃん……でいいかな？　これからも妹と仲良くしてね」

「あ、はい。もちろん……」

下げていた顔を勢いよく上げ、返事を返す。その時、響の顔を見て突然言葉を止める棗。途端に何かを思い出すように人差し指をおでこに当て考え出す。

「どうしたの棗ちゃん？」

そんな棗の様子が気になり、響が問いかける。するとそれまでの考える仕草をやめ、視線を響に戻しながら、おずおずと口を開く。

「あ、えっと、失礼ですけど先輩？　今まで何処かでお会いしましたか？」

「？　いや、たぶん初対面だと思うけど？」

棗の疑問に響は答える。響の様子は本当に覚えがないといった表情である。

「そう……ですよね、すみませんでした。昔お世話になった人にちょっと雰囲気が似てる気がしたもので……」

そう言って頭を下げる棗。響はその棗の様子に慌てて、言葉を返す。

「いいって、いいって。気にすんな」

と言う響だが、尚も棗は頭を下げる。どうやら初対面の人を他人と勘違いしたのを、相当失礼だと思っているらしい。

「棗、あんた相変わらず堅苦しいわね。」

「でも理沙ちゃん。失礼なこと聞いたのは私だし……」

理沙は昔から変わらない棗に呆れたように声をかける。理沙に声をかけらた当の本人は俯いてしまう。

「2人は結構仲が良いんだな？　それと棗ちゃん。俺は全然気にしてないし、言葉使いとかもあまり気にしないからいいよ？」

「ええ、私たちは家が近所っていうこともあって幼馴染なのよ。響もこう言ってるし、もうちょっと肩の力抜きなさい」

理沙は響の疑問に答えながらに言う。2人に諭されて、流石に態度を改めないとと思ったのか、それまで下げていた頭を上げ、恥ずかしさからか顔を赤らめる。

「うう、わかりました」

了解の返事をしながらも結局敬語の棗。「そういうところが……」などと響の隣でぶつぶつと理沙が言っていた。

「どれ、一通り自己紹介も済んだようじゃの。そろそろ本題に入るぞ？」

自己紹介のタイミングを見計らって声をかけてきた学園長に従い、響たち5人は整列する。左から順に、響、理沙、努、心、棗の順である。5人の前に出てきた一心が言葉を発する。

ちなみに響達と学園長が義理とはいえ親子の関係であることは秘密になっている。

「今日この訓練場に集まってもらったのには訳があっての。今日から班を組むお前らはまだ互いの実力を知らんからの。その確認を含めて模擬戦を行おうと思う」

「よっしゃ～。久々にバトルができるぜ～。燃えてきた～」

学園長の言葉に努のテンションが上がっていく。指の骨をポキポキを鳴らしながら、いかにもヤル気十分です、と言わんばかりである。

「うむ。資料によると、響が魔導士ランクAで近距離戦が得意。心も魔導士ランクはAで中遠距離戦が得意。真田が魔導士ランクAで

近距離戦が得意。黒沢が魔導士ランクＡＡで中遠距離戦が得意。姫咲が魔導士ランクＡで遠距離・広域殲滅・サポートが得意。違いはないかの？」

その確認に５人は「はい」っと返事を返す。一心が述べたのは前回のランク試験までの結果である。まぁ、響と心はリミッターがかけられているため、本来の実力とは程遠いのだが、それでも一般の学生に比べればかなり高ランクに相当する。

「お前、魔導士ランクＡＡもあるんだな」

響が努に対し疑問投げかける。その言葉には純粋に驚きが込められていた。学生の身でＡＡランクを取るのはほんの一握りである。

「へっへーン、どうだ？少しは見直したか？響」

努は自慢げに胸を張る。

「こいつはただの体力馬鹿なだけよ、響」

そんな努の態度が気にくわなかったのか理沙が横から口出しする。その言葉に「なるほど」っと納得する響。３人のやり取りを聞いている心と棗は苦笑している。

「なんだと！？　なら模擬戦で俺の実力を見せたるぜ」

気合を入れる努。自分の頬をパンッっと良い音を鳴らして叩く。

ちなみに魔導協会で活動している魔導士の平均ランクはＢ～Ａであり、高校生でＡやらＡＡランクの理沙や努、棗は魔導士全体の中

でもかなり優秀な部類に入る。まぁ、響や心は別格だが……

「模擬戦の相手じゃが、まずは心と黒沢。次に響と真田という順で行う。流石に姫咲に１対１で模擬戦は無理じゃろ。姫咲は模擬戦後の治癒などで力を見せなさい。それでは１５分後に始めるぞ」

その言葉に返事をし、一同は模擬戦の準備に取り掛かった。

「なぁなぁ、心ちゃんはどんな魔導媒体を使うんだ？」

準備体操をしながら努が響に声をかける。

「心は扇型の魔導媒体だな。得意な属性は風だ。風を起こして攻撃したり、扇に風を纏って近距離戦闘もこなすぞ」

響はサラッと答える。模擬戦とは言え、これから対戦する相手の情報を洩らすのだ。ましてや相手は自分の妹。流石に教えてはもらえないと思っていたのか、努ですら呆然としている。

「に、兄さん！？　何で対戦相手にそんな情報を与えるんですか！努先輩！　先輩のも教えてくださいよ！」

普段の響の行いを諦めていたとは言え、流石に今回ばかりは響の答えにツッコム。

「どうせすぐに分かることだろ、心？」

「そうだぜ心ちゃん」

響と努は結託して心をからかう。こんなときだ力が合わさるのだから不思議である。その最中で響は心にしか気づかれないようにウインクする。

（まさか、このくらいのハンデで負けたりしないよな？）

響の言いたいことは心には正確に届いていた。響はこんな時でも修行のため、あえて情報を漏らしたのである。それが分かったら心としても、これ以上何も言えない。本来の実力は心が上とは言え、現在はリミッター付き、しかも相手は自分より高ランクである。はっきり言えば、心にそんな余裕はない。だからと言って負ければ、兄にどれだけ弄られるか分かったものではない。

「む～～～、そうですか、いいですよ～だ」

しょうがなく頬を膨らませながら拗ねる心。その姿を見た努が（う、可愛い）などと思ったのは別の話である。

「ちなみに俺は刀を使う。得意属性は雷だな」

響は突然自分の情報までも暴露する。心は、やはりっとため息をついた。兄が妹だけに試練を課すわけがない。当然自分の情報もばらすに決まっている。心の考えは見事的中していた。

「「え！？」」

なんな響の言葉に反応する声が２つあった。理沙と棗である。しかし２人が驚いた理由は、それぞれ別のものからきたものだった。

「あら、響？　そんなこと私の前で言っちゃっていいのかしら？」

冷静さを取り戻した理沙が聞き返す。

「ああ、ちょうどいいハンデになるんじゃないか？」

そんな理沙に対し、ニヤニヤした響が返す。その言葉を聞いた理沙は「なぁぁ！？」っと顔を赤くして眼を見開いた。ここまであからさまな挑発を受けたのは初めてなのである。当然怒りもそれに比例し大きくなる。

「いい度胸してんじゃなぁい、響？　教えたことを後から後悔しても遅いわよ？」

こめかみをピクピクさせながら理沙が言う。

「できるものならやってみろよ」

その言葉に火が点いたのか、理沙は「フンッ」っとそっぽを向き入念にストレッチをしだした。

それらの騒動を聞きながら棗は響のさっきの言葉を思い返していた。

『ちなみに俺は刀を使う。得意属性は雷だな』

棗は考える。5年前、妖魔に襲われていた自分と理沙を助けた七聖「獄炎」と一緒にいた男の子を。確かあの男の子は自分のことを

「雷牙」と呼んでいた。当時魔導協会のデータベースで調べたところ、確かに「雷牙」と言う名持ちは存在した。しかしそれだけだ。それ以上のことは調べることができなかった。

（確かあの子も刀を使って、雷を放っていたよね？）

同じ条件に当てはまる人が世界に何人いるのか、そんなこと棗には分からないが、それでも考えずにはいられなかった。

（今日初めて会った時も、なんか初対面って感じがしなかったし・・・）

そんなことを考えてた棗を後ろから突然の衝撃が襲った。

「キャ！」

「棗ちゃん？　どうしたの？」

心が後ろから棗に抱きついてきたのである。黙っていた棗を心配して声をかけてくれたらしい。

「心ちゃん！？　どうしたの？」

「もうすぐ始めるってさ、行こ？　棗ちゃん」

そう言いながら棗は心に引っ張られ、思考を停止した。

第４話：班員集合（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
アドバイスや感想、レビューなども常時受け付けておりますので、
よろしくお願いします。

次回は模擬戦が始まります、心ＶＳ努
今日の午後には更新できると思います。

第5話：心ＶＳ努（前書き）

予想よりちょっと遅くなったけど更新。
プロローグも少し追加しましたので確認してみてください。
今回はバトルが入っています。表現などおかしくないか心配です。

第5話：心ＶＳ努

その後。

訓練場の中の少し高くなっているリングの上には心と努が2人で立っていた。

この訓練場は周りが観客席のようになっており、自動で観客席と訓練場の間をシールドで覆っているのだ。このシールドはかなりの強度で、学生レベルではとても壊せる代物ではない。藤歌学園にはこういった訓練場がいくつも設置されている。流石は日本最大の魔導士育成機関だ。授業などで使うこともあるらしい。

「模擬戦のルールは、どちらかが敗北を認めるか場外に出た時点とする。もちろん武器は非殺傷での」

魔導媒体は殺傷、非殺傷の2つの設定から選ぶことができる。普通訓練や犯罪者の逮捕などは非殺傷で行われる。これは魔力によるダメージで気絶させるものである。殺傷設定は言葉の通り、肉体的に相手を傷つける設定である。よほど緊急の場合でしか使うことができないし、許されない。

一心の説明に返事をした二人はお互いに戦闘態勢をとる。心を見据え腰を落とし、いつでも動ける体制の努に対し、心は自然体。若干右足を前に出し半身になった状態である。

「行くぞ！「ガリウス」！」

努が右耳のピアスに手をかざしながら言うと、一瞬ピアスが輝き、その手には銃身が３０センチ程になるリボルバー式の銃が握られて

いた。通常のハンドガンよりもかなり大型の銃である。

「銃型の魔導媒体ですか。珍しいですね。吹き荒れろ「仙奈」」

心がポケットから出した扇を開きながら言うと、その扇が輝き、心の体を隠すようにその大きさを増した。扇に描かれた桜の模様が特徴である。

「でかい扇だな、心ちゃん。手加減はしないけど、いいよな？」

「望むところです」

努の問いかけに返事を返した心。心の顔にも努と同種の笑顔が浮かぶ。

「準備はいいかの？それでは・・・開始！！」

２人の様子を確認した一心の声が訓練場に響いた。

開始の合図と共にまず動いたのは努である。

努は右手に持ったガリオスを心に向け、トリガーを2回引く。それと同時に自らは距離を取るように後ろへと跳躍する。一瞬で展開

された魔力弾が心に向かっていく。

一方心は努のその行動を見て瞬時に開いていた仙奈を折りたたみ、身体強化の術式を展開、魔力弾を回避する。

「っ！」

それと同時に前方で展開される大きな魔力反応に気付いて目を向ける。そこには距離をとった努がガリオスに魔力を溜め、トリガーを引こうとしていた。

それを確認した心は仙奈を開き自分の体の前に展開させ防御の術式を展開する。扇の前に大きな魔法陣が出現、それが盾のように射線上に展開された。

「くらえっ」

その言葉と同時にトリガーを引き、ガリオスの銃口から砲撃魔法が展開された。その砲撃、緑色の魔力の塊は一直線に心に向かっていき、着弾と同時に大きく爆煙を発ててその姿を飲み込んだ。

「努も意外とやるな。きちんと銃型魔導媒体の特性を活かして戦術を立ててるみたいだな。」

観客席で見学していた響は率直に感想を漏らした。

銃型魔導媒体は特徴として魔力を媒体に集めるだけで自動で射撃

魔法へと変換し、トリガーを引けば射出してくれることだ。
そのため術者は身体強化や防御といった他の術式に集中できる。さらに連射もできるので、手数を多くできるし、流す魔力量によって先ほどのように砲撃もできる。
その代わり、流された魔力を勝手に射撃魔法へと変換するため応用がきかないといった欠点がある。

「ただ単にあいつが馬鹿なだけよ。魔力はあるのに術式を組み上げるのが苦手で、だから楽のできる銃型を選んだの。」

その説明にまたも「なるほど」っと納得する響。やはり彼が馬鹿であることは最早否定できないらしい。

「心ちゃん大丈夫でしょうか？」

煙で姿の見えなくなった心を心配するように、響に声をかける棗。

「大丈夫だよ、棗ちゃん。心はあのくらいじゃやられない」

兄である響は異常なくらい落ち着いていた。なぜこんなにも落ち着いているのか。理沙や棗は疑問に思ったが口には出さない。その落ち着きは、響自身の経験や今の戦闘を客観的に分析したものだと言えるかもしれない。しかしそれ以上に、響の眼からは心に対する信頼が読み取れた。

そんな響の様子に口を出せない2人は訓練場に視線を戻した。ちょうどその時、訓練場内でも変化が起こり始めていた。

努は煙の巻き起こる着弾地点を警戒しながら見ていた。普段の努であれば、勝ったと思い油断していたかもしれない。しかし今日は違った。確かに自分の魔法は命中した。だが、あれで倒せるとは思わない。そんな予感のようなものがあったのだ。

ゴウッ

突如その中央の煙が音を立てて周囲に霧散した。
そこには体に風を纏った心が無傷で姿を現した。

「マジかよ！？」

努が声をあげる。純粋な驚愕。確かに倒せるとは思っていなかったが、ダメージは与えられると思っていた。しかし、結果は無傷。そこに努は驚いたのだ。

「今度はこちらから行きますよ、努先輩」

微笑みながら声をかける心。

「……やっぱ、そうこなくっちゃな」

驚愕から立ち直った努は嬉しそうに顔を輝かせる。

「行きます」

そう言いながら開いていた扇をそのまま自分の右側へと振りかぶ

り、左へと振りぬく。それと同時に扇の先端に１０個の魔法陣が浮かび上がり術式を展開する。

「エアスラッシュ！」

展開された魔法陣から放たれた１０の刃は様々な軌道をたどって努に向かっていく。一見無秩序に見える刃の軌道は心によって制御されているものだ。逃げ道をふさぐように迂回しながら努に迫る。

「ふっ」

それを努はさっきとは逆に前へと出る。後ろへ下がればまた刃が迫ってくる。なら突破するのは前方。自分に命中する風の刃を的確にガリオスの魔力弾で相殺しながら距離を詰める。

「流石ですね。なら、これならどうですか？」

瞬時に判断した努の判断能力を褒めつつ、それを見た心は開いたままの扇を頭上へと持ち上げそれを地面に向かって扇（あお）ぐ。

地面に一瞬魔法陣が浮かび、その先の地面の砂が巻き上がり風と共に努へと襲いかかる。

前方広範囲への風と砂の魔法、「サンドウイング」である。

「ちぃっ」

それを見た努は跳躍。その直後砂と風の波が努のいた場所を吹き飛ばして行った。その威力は想像以上。しかし、今それを気にする余裕はない。着地後そのままの勢いで心に向かっていく。

そしてガリオスとは逆の、左耳のピアスに手をかざしながら叫ぶ。

「来い！カリム！」

その瞬間彼の左手には逆手持ちに短剣が握られていた。シンプルな見た目に、金の装飾が良く栄える。努の２つ目の魔導媒体「カリム」である。

努はそのまま勢いで心へと切りかかろうとして

「なにっ」

突然努の足もとに魔法陣が現れ、そこから伸びたロープのようなもので縛られていく。振りほどこうともがくが、一向にほどける気がしない。

「設置トラップ型の拘束魔法「トラップバインド」です。煙の中にいる時に周辺に仕掛けさせてもらいました」

手に持った仙奈を折りたたみその周りを薄い風の刃で覆い努の首に突き付ける。

「私の勝ちですね♪努先輩」

満面の笑顔で言う心。その笑顔を見ながら敗北を確信する努。

「そこまでじゃ！！勝者、心！」

一心が試合の決着を告げる声で模擬戦が終了した。

試合後、拘束魔法を解除してもらった努は

「俺が格闘戦に来ることを読んでたのか？　それにいつバインドを設置したんだ？」

疑問を口にした。設置トラップ型の拘束魔法、心はそう言ったが、トラップ型の拘束魔法は対象が範囲に入らないと発動しない。その分拘束力は強く、一度捕まったら簡単には抜け出せないのが特徴だ。

「はい。銃型の魔導媒体は応用が利きませんから。もう一つ魔導媒体を持っている可能性を考えました。そして持つのなら、銃の弱点を補うために近距離戦闘用の魔導媒体かと思いまして、エアスラッシュを前方に回避させるように放って格闘戦を誘ったんです。バインドは先輩の魔法で煙に紛れている時に、周りに設置させてもらいました」

心がスラスラ説明する。そんな心の様子に、呆気にとられたような表情をする努。努からすれば、そこまで考えながら戦闘を行っていた心が信じられないといったところであろう。

「なるほど、まんまとはめられたわけだ。やれやれ、俺の完敗だな。強いな、心ちゃんは」

「いえいえ、努先輩も強かったですよ。またお相手お願いします」

笑顔で答える。その笑顔を見た努は「お、おう！」とどこか照れ

ながら答える。それを期に努と心は訓練場を降りて行った。

模擬戦第一試合、心ＶＳ努

結果・・・心の勝利

第5話：心ＶＳ努（後書き）

初バトルの回でした。どうだったでしょうか？
感想やアドバイスお待ちしております。

第６話：賭け（前書き）

今回は少し短めです。

第6話：賭け

「結局負けちまったな、努？」

「ぐぬぅっ」

模擬戦を終えて観客席へと帰ってきた努に響は声をかけた。その言葉に何も反論できない努は声を詰まらせる。

「「模擬戦で俺の実力を見せたるぜ」とか言ってなかったっけ？」

ニヤニヤしながら努のものまねをする響。

「兄さん、もうその辺にして・・・ってああ！　努先輩！？」

注意しようとした心はしかし、途中で黒いオーラを纏って隅に行き、のの字を書く努を見て中断する。気のせいか、そこだけ空気が黒く歪んで見える。どうやら響の言葉が努の心を抉ったらしい。

「いいんだ、いいんだ。俺はどうせ体力しか取り柄がない馬鹿だから……」

「そんなことないですよ、努先輩！　努先輩だって……」

「さてと、次は俺らの番だぜ、理沙！」

落ち込む努とそれを必至に励ます心を見て満足したのか、響はその場を放置して理沙へと話しかける。隅の方では尚も落ち込む努を心が励ましている。勝者に励まされる敗者。心は自分が励ますこと

が逆に努を落ち込ませていることに気づいてはいない。

「あんた、ほんとにいい性格してるわね？」

そこまで分かっていながら放置し話を進める響に対し、頬を引きつりながら声をかける。まだ付き合いは短いものの、理沙は響がどのような人間かを悟り始めていた。

「だろ？　よく言われるぜ！　人生楽しむのが一番」

ビシッっと親指を立てながら満面の笑顔を浮かべる響。棗は苦笑するしかできない。

理沙は「だめだこりゃ……」と頭を抱えている。まともな人が来たと思ったら問題児なのである。理沙にとっては、これから自分に掛かる負担を思い浮かべると憂鬱になる。いっそ自分も放置しようか、そんな考えが浮かぶが、理沙はなんだかんだ言いながら世話を焼くのである。彼女がこの班一の苦労人かもしれない。

「そんじゃ、いっちょ行くか！！」

「頑張ってくださいね。響先輩」

と声をかける棗に対し、「おうっ！」と言いながら右手をあげて観客席を出ていく響。その後を若干疲れた顔の理沙が付いて行った。

「棗ちゃん？　どうだった？　私の試合。」

一通り努の説得を終えた心が棗に声をかけたのは2人が出て行ってすぐのことだった。心の後方には、まだ顔色が悪いもののなんとか気力を取り戻した努がいる。

「お疲れ様、心ちゃん。試合すごかったよ。心ちゃんって強いんだね」

正直な感想を述べる。努はこれでもかなりの高ランクであり、学園中でもトップレベルの実力者である。魔導士全体で見ても高ランクであろう。その努に勝ったのだから心も実力者である。

「いや～、それほどでも」

照れながら率直な感想を言った棗に返す。あまり普段こう言った素直な感情に触れる機会がなかった心は、どういった返事をすればいいのか迷った。小さいころから大人の世界に身を置いてきたのだ。同年代がいなかったわけではないが、そこまで仲がよかったわけではない。

「謙遜するこたねぇぜ、心ちゃん。何といっても俺に勝ったんだからな！！」

その心の返事を謙遜ととった努が声をかける。

「努さんもお疲れ様です。ケガしてませんか？」

「大丈夫だ。精神はズタボロだが、体は無傷だ」

ケガの有無を尋ねた棗に、そう言って返す努。その言葉に心と棗

は顔を見合わせ苦笑する。先ほどまでの状態を思い出したのであろう。

「そ、そうですか。ケガがなくてよかったです」

苦笑交じりで答えた。

「あ！　兄さんたちが出てきたよ」

心は言いながら観客席の前列まで移動する。努は「どれどれ」と体を前に出して見た。ちょうど心の後ろから背の高い努が覗きこむ形になる。棗は心の隣に駆け寄り、模擬戦が見える位置に移動した。

「心ちゃん。やっぱり響先輩も強いんですか？」

棗は心に聞いた。その瞳には興味の色が見て取れる。棗の疑問の答えが気になるのか、努も心の方を向きなおし耳を傾ける。

「そりゃ強いよ！　私は何回やっても勝てる気がしないかな」

棗の言葉に当り前のように即答する。過去に行った模擬戦の様子を思い出し、事実を述べる心。

「でもよ、魔導士ランクは同じなんだろ？」

棗の質問に答えた心に努が聞く。心も響も魔導士ランクはA。学園長の言葉を思い出した棗も頷く。

「たいていは、魔導士ランクが同じならそんなに勝率に差は出てこないと思うんだが。相性の問題か？」

通常、魔導士のランクは個人の強さだけを示すのではなく、魔法の発動速度、規模、魔力量など様々な能力を総合してランクにしている。上位のランクになると指揮能力といったものも加わってくる。

そのため、戦闘になると魔法の連携や相性によって低ランクの魔導士が高ランクの魔導士を倒すというのは結構有り得ることである。

その点で、努の疑問は響の正体を知らない者にとって当然の疑問であり、棗も同じことを思っていた。

それに対して心の返答は、努や棗の予想していた答えとは違っていた。

「いいえ、兄さんと私とでは「経験」がまるっきし違います。私がどんな手を使ったとしても兄さんはそれに即座に対応して打開してしまいますから」

（？？？？）

当然、努と棗の頭の中は混乱している。まるで長年闘っていたかのような言葉。この時、棗と努は心の言葉の意味を理解することはできないだろう。「経験」がいかに重要か、強力な武器になるか、それは達人の領域。理沙を含めた3人がそのことを理解するには、もう少し時間が必要だった。

「心ちゃん、それってどういう「あ！始まるみたいだよ」……」

棗がそのことを聞こうと思ったとき、心の言葉に遮られタイミングを失った。納得していない2人はしょうがなく視線をリングに向けるのであった。

リングにはそんなやり取りとは関係なしに、2人が立っている。様子から、響はそんなことないが、理沙はやる気十分のようだ。どうやら先程の挑発が効いているようである。

「さて理沙。お前の実力を見せてもらおうか？」

尚も響は偉そうに言う。完全に上の立場からの言葉。自分は負けない、自身で溢れ返ったような言葉を理沙に向ける。

「それはこっちのセリフよ、響！そんなに偉そうにしてて負けたら恥ずかしいわよ？」

挑発には乗らない理沙。理沙とて戦闘前に自分の感情のコントロールの大切さは分かっている。これ以上余分な感情はいらない。

「安心しろ理沙、俺は負けないからそれだけは有り得ない」

しかし即答する響を見て、あえなく失敗する。

「ムカァ。そんなに自身があるなら響、賭けをしましょうか？」

自信満々な響を見て提案した。それだけ自信があるのなら絶対に断れないはず。そんな確信が理沙にはあった。

「ああ、かまわんよ。それじゃ勝った方が負けた方に1つ命令できるっていうのはどうだ？」

これまた即答で返す響。

「いいわよ、乗った。拒否権はなしね。絶対あんたに吠え面かかしてやるんだから」

賭けの内容を少し考え、問題ないと判断、賭けに乗ることにする理沙。その自信ごと徹底的に叩き潰す。それ以外考えていなかった。

「あえて言おう、『それは不可能である』と」

火に油、いや爆薬を放り込むように挑発する。ブチィっと何かが切れる音がしたような気がする。理沙の周囲の空間が、何故か歪んでいるような気がする。この後、しばらく無言の睨み合いが続いた。

第６話：賭け（後書き）

次回、響ＶＳ理沙になります。お楽しみに……

第７話：響ＶＳ理沙（前書き）

響ＶＳ理沙です。冬休みも終わり、学校が始まりました。作者は就職活動などで、今年は忙しく、執筆の時間が取れなくなりそうで嫌です。なんとか時間を確保しなくては

第7話：響VS理沙

「そろそろいいかの？　2人とも」

タイミングを見計らった一心が、若干冷や汗をかきつつ声をかける。よほど理沙のプレッシャーが凄いのだろう。元七聖なのに学生に冷や汗をかかせられるとは……

「はい、こちらは準備完了です」

涼しげに響は答える。その顔からはまだ余裕が窺える。

「望むところよ」

気合い十分にこたえる理沙。背後に修羅が見えるのは気のせいだろう。

響は右手を前に出し、理沙は胸の前で左手の甲に右の掌を合わせる。そして同時に自らの相棒の名を呼ぶ。

「奔(はし)れ、『柳(やなぎ)』！」
「猛(たけ)れ、『竜麟(りゅうりん)』！」

右手の指輪からまたは、両手のブレスレットがそれぞれ輝く。治まったときには、右手に鞘に入った刀を持った響と、両手両足を赤と黒の手甲、脚甲で覆った理沙が立っていた。

鞘に入った右手の刀を左手に持ち替え、右手で柄を握り、刀を引き抜く。その刀身は澄みわたった色をしており、手入れがいきとど

いていることがうかがえる。

だがしかし、理沙の魔導媒体を見た響は背中に悪寒を感じていた。

彼の師であり姉である七聖「獄炎」は手甲の使い手であり、幼いころから修行という名の調教を受けていた響は本能的に一瞬その光景を思い出してしまった。

くしくもその時、見学席にいた心もまた過去を思い出し身震いして棗に心配されていたが、そんなこと響が気づいているわけがない。

「両者、準備はいいみたいだな？」

一心のその声で平静さを取り戻した響は「はい」と返事をし、理沙もまたそれに続いた。お互いに腰を落とし睨み合う。響もこれまでの余計な感情を捨て、気持を切り換えていた。戦闘前独特の空気が漂う。

「うむ。それではこれより模擬戦を始める。・・・開始！！」

その言葉を合図に二人は同時に動き出した。

開始の合図とともに二人は距離を詰める。

「はぁっ！」

「ふっ」

理沙は自分の顔の脇から少し下へと叩きつけるように右手を振る

う。
対する響は下段に構えた刀を左足を踏み込むと同時に振り上げる。
ギィィィン
甲高い音が訓練場に響く。お互いの攻撃は一瞬拮抗するも、上から叩きつけたからだろう、理沙が押し勝った。
反動で後退する響を追うように、右手を振った勢いをそのままに体を捩り回転、右足を軸に回し蹴りを放つ。
その蹴りを見切って回避した響は、回避しながら右手の刀を逆手に持ちかえる。そして、足首、膝、足の付け根、腰、肩、肘、手首の順に体の関節を目一杯使って回転エネルギーを刀に乗せ、理沙へと放つ。
「如月流刀術（きさらぎりゅうとうじゅつ）　流円閃（りゅうえんせん）」
それに気づいた理沙はとっさに両腕を交差させ、防御する。
ズガンッ
およそ刀での攻撃とは思えない音を立て、理沙の手甲に当たった斬撃は、そのまま理沙の体を１０ｍほど後退させて効力を失った。
「……いっつ～～、なんつう威力の攻撃よ！　今の音ってどう考えても刀じゃ出ないでしょうが」
まだ痺れの残る両手を振りながら響を睨む。

「如月流刀術　流円閃。全身の関節を円のように流れるように順序良く回転させて、すべての運動エネルギーを刀に乗せる技だ。今のでケリをつけるつもりだったんだがな」

「ああ！もういいわよ！出し惜しみは一切なし。全力で叩き潰す！」

響のその言葉にカチンときた理沙は魔力を両手へと集中する。目で見てわかる程の濃密な魔力が集まっていく。

ゴウッ

突如音を立てて手脚甲「竜麟」炎が上がる。真っ赤な炎は理沙の周囲を包みこむように広がる。その熱気は響にまで届くほどであった。

（オイオイ、炎まで姉さんとおなじかよ……）

内心結構参っている響。またも幼い日のトラウマを刺激されたのである。背中には冷や汗が垂れる。

「ふぅ～、しょうがない」

そう言うと響は体全体に魔力を纏う。薄い魔力の膜。それに意識を向け、自分の色に染めていく。

バチッ　バチッ

すると体がかすかに帯電する。

それを今度は「柳」に集め、帯電させる。「柳」は小さな稲妻を

迸らせながら白く輝いていく。

『白雷（びゃくらい）』

響の固有術式であり、圧縮された雷が白く輝く様から名づけられた。体や刀などに纏わせることができる。また響が使う雷系統の魔法は白雷がすべて基になる。

「それがあんたの本気？」

「さぁな？」

理沙の問いに笑いながら答える。響の本気としては程遠いが、本当のことも言えない。だが、響にしてみれば白雷は本来出すつもりなどなく終えるはずだった。理沙の予想以上の実力、それから心のトラウマが酷かったということだろう。

理沙「フンッ、まぁいいわ。やることに変化はないし。覚悟はいいわね？」

「ご自由っに！！」

そう言いながら柳を振るう。そこから魔法陣が展開され、白い稲妻が発生し理沙を襲う。

初級魔法である「ライトニング」である。初級魔法とはいえ、何の予備動作も感じさせず展開から発動までをこなす響は相当な実力者である。

「っ！？」

一瞬、魔導媒体で防御使用とした理沙だが、瞬時に攻撃の性質を見切り防御壁を展開し防ぐ。

「咄嗟に防御壁を展開したのは正解だな。さっきと同じように手甲で防いでたら感電していた」

理沙の行動を褒める響。相変わらず挑発することを忘れない。まるで稽古をつけているような響の物言いと不意打ちにイラつきが増していく理沙。事実、響は理沙を稽古しているのだが、理沙がそれを知ることはないだろう。

「相変わらず、いい性格っね！！」

そう言いながら頭上に両手を掲げ、炎を収束、それを響に向って放つ。

「フレイムウェーブ」

解放された炎が波になって響に襲い掛かる。それを響は左手を前に出し防御壁を展開し防ぐがそこで気づく。

（やるな！？　目くらましか！）

押し寄せた炎に周りを囲まれ、視界が遮られる。理沙の狙いは攻撃ではなく目くらましだった。

理沙の姿を見失った響は慌てず意識を集中する。戦闘中で研ぎ澄まされていた感覚が、さらに鋭敏になる。

突然、響の左後方の炎が動く。

「バーンフィスト！！」

そこから理沙が現れ、紅蓮の拳を突き出す。そのまま炎を纏った拳が響に迫る。

ガキィィィン

だがそこは場数を踏んでいる響だけある。空気の流れ、炎の動きを読み、それを察知し白雷を纏った柳でそれを受け止る。普通ならそこで感電するのだが。

「器用なことを……」

拳に魔力の膜をかぶせ、感電を防いだ理沙を称賛する。

それでも余裕そうな表情の響を見て、なおも理沙は攻撃の手を緩めない。

「もらったーー」

自身の切り札である、右手と同じ術式を展開する左拳を突き出す。それまでは理沙の体に隠れ響からは見えなかった左腕。普段なら魔力反応で感知できた響だが、現在は周りを魔力でできた炎が覆っているため気づくのが遅れた。その結果まで理沙が予測していたのかは不明だが、響を驚かせるには十分だった。

（術式の同時展開！？　高校生の技術じゃねぇだろ）

自分の予想の上を行った理沙。それを見て珍しく驚いた顔を見せ

る響。理沙は内心で勝利を確信する。普通の学生レベルなら、ここで勝負がついただろう。

しかし、響は普通の学生ではない。

「っ！？」

突然右手とせめぎ合っていたはずの力が消失した。理沙は拮抗していたはずの力が消え、前のめりにバランスを崩す。見ると目の前には「柳」だけが存在する。響の姿が見当たらなかった。

「忠告だ。勝利を確信しても油断はするな。それが隙になる」

「！？　しまっ」

理沙は、いきなり自分の懐近くから聞こえてきた声に驚く。それが響であると認識した瞬間、咄嗟に距離を取ろうとするが既に遅い。理沙が次の行動に移すより早く、響は行動に出ていた。

「それから、刀を持ってるからといって刀で攻撃するとは限らん」

そう言いながら自身の右手に白雷を集中させ理沙の鳩尾あたりに掌を当てる。理沙はその行動を見るしかできない。突然の力の消失でバランスを崩し、さらに無防備な懐に入られているのだ、響の行動を認識しているだけ優秀だろう。

ズガンッ

瞬間、理沙の体を白雷が通り抜け背中から抜けて行った。背中から空中に白い稲妻が奔る。

「嵐山流格闘術一の型　浸透頸（しんとうけい）の変化　白雷掌（びゃくらいしょう）」

浸透頸とは魔力を使い打撃点を基点とし体内部へ攻撃する技で、白雷掌はそれを白雷で行った響のオリジナル技である。魔力による体内ダメージ、感電による外的ダメージ及び麻痺効果。この技は、それらを同時に行うことで、本来なら一瞬で対象の意識を奪うだけの威力がある。

「術式の同時展開は焦ったが、最後の詰めが甘かったな」

理沙は薄れていく意識の中で最後に響の言葉を聞いていた。

（最後まで偉そうに……）

自分の敗北を感じつつ、最後まで稽古をつけるような響の態度に悪態を吐きながら意識を手放した。

突然響と理沙を囲んでいた炎がなくなり、その中から理沙をお姫様抱っこした響が姿を現す。理沙が気を失ったため魔力の供給がなくなり、魔導が消失したのだ。

「なんだ？　いったいどうなってたんだぁ～～～！？」

観客席では、今まで炎のせいで模擬戦がどうなっていたのか、どう決着がついたのか見えていなかった努の叫びが聞こえてくる。ことなく棗も響の模擬戦が見れなくて残念そうである。ただ一人、心だけは顔を笑顔で覆い、やっぱりと頷いている様であった。

「それまで！　勝者、響！！」

姿を現した2人の姿を見た一心が試合の結果を告げ、模擬戦は幕を閉じた。

模擬戦第二試合　響ＶＳ理沙

勝者　響

第７話：響ＶＳ理沙（後書き）

次の更新は少し間が空きます。まだ修正が終わっていないので……

第8話：結成（前書き）

今回は結構長くなりました。でも内容が薄いかもしれない……
そのうち専門用語集などを作りたいと思います。

第8話：結成

理沙「う～～ん」

試合後理沙はすぐにその意識を覚醒させた。まだ霧のように霞んだ思考の中で、必死に閉じていた瞼を開け、ぼやけた視界で辺りを見回す。傍(はた)から見ると、キョロキョロと辺りを見回すその姿は、寝起きの少女を連想させ、普段の理沙の強気な態度からは予測できない可愛さがあった。

目を開けた理沙の目に、最初に飛び込んできたのは空。太陽が沈み始め、若干赤くなった空に、ところどころ雲が浮かんでいる。今はもうすぐ夏に入ろうかと言う季節なので寒さは感じないが、きっと夕方なのだろうと当たりを付ける。

上に向いていた視線をそのまま横に向ける。そこには、いつも自分が使っている訓練場の景色が広がっていた。なぜ訓練場で目が覚めるのか、理沙は徐々に霞の取れてきた意識で考え始める。観客席のほうから努、棗、心の順で駆け寄ってくるのが確認できた。どうやら自分に向かってきているようだ。

理沙「っ！？」

そこまで確認して理沙は自分が模擬戦で響に負けたことを思い出した。模擬戦の最後に見た響の顔が頭に蘇る。自分が負け、気絶させられたからと言って、いつまでも無防備な体勢を晒すのは彼女のプライドが許さなかった。急いで起き上がろうとするが、自分の体を思ったように動かせない。いや、体は動くのだが、踏ん張りとなる支えがないのである。そこで自分の体が、何故か不安定な空中に

浮いていることに気づく。

響「お？　目ぇ覚めたか？」

急に自分のそばから声が聞こえ慌てる理沙。その声には聞き覚えがあり、さっきまで自分が思い浮かべていた少年と一致する。何故自分の耳元で彼の声がするのか、そう疑問に感じつつも、ゆっくりと声のした方を振り返る。突然、視界一杯に響の顔が写りこんだ。

理沙「きゃぁっ！？」

響「危ねえな？　落としちまうだろ」

理沙は急に自分の視界に写り込んだ響に驚きの声を上げる。ぼやけていた視界が一気に覚醒し、霧がかっていた思考もクリアになる。対する響は飛びのこうとして身をよじった理沙に抗議の声をあげた。

そこで初めて理沙は自分の状態について考える。もはや考えるまでもないのだが、それを受け入れたくないのか、はたまただの照れ隠しか、一つ一つ順を追って考えを巡らせ始めた。

理沙（落としちまう？　何を？　私を。どうして？　かかえてるから）

一通り自問自答を終えた理沙は、やはり一つの現実を受け入れざるを得なかった。そう、お姫様抱っこと言う現実を。

理沙は普段からの強気な態度や積極的な行動と相まって、活発で色恋沙汰には興味がないイメージが定着しがちである。実際に浮ついた話一つないのが、そのイメージに拍車をかけていた。

しかし、理沙とて年頃の女の子であり、そう言ったものにも興味

はある。少女マンガだって普通に読むし、ヌイグルミ等の可愛いものも好きである。
そんな彼女だからこそ、憧れる時もあるのだ。お姫様抱っこと言うものに。奇しくも彼女の憧れが一つ叶った形になるのだが、本人はそこまで考える余裕はないだろう。

マンガやゲームの世界では定番なお姫様抱っこだが、現実では早々そのような機会があるわけではない。さらにそこに、彼女のプライドが現在の状況を許さない。ボンッっと音を立てて瞬間沸騰した理沙は、なんとか状況を改善しようとジタバタともがく。

理沙「ちょっと!?　なんて格好させてるのよ!　早くおろして」

響「ちょっ、お前。暴れんな!　ホントに落とす・・イテテテッ」

そう言って響は頬をギュッとつねられる。その痛みに耐え、崩しそうになる体勢に耐え、なんとか理沙を降ろすことに成功した。あいた手で赤くなった頬を撫でる響。理沙は、少しやりすぎたかな、と内心で反省するが、それを表に出すことはしない。それ以上に平静を取り戻すことに集中したかった。

理沙「ぅう、どうしてあんたがお姫様抱っこなんてしてるのよ、バカ!!」

響「ここにそのまま寝かせとく訳にもいかんだろうが」

結局沈黙に耐えられなかった理沙は、赤くなった頬を隠しながら悪態をつく。明らかな照れ隠しである。対する響も、もっともな反論を返す。響の返答に反論できずに言葉に詰まる理沙。

努「お～い大丈夫か？　ん？　理沙どうした、顔が真っ赤だぞ？」

そこに駆けつけてきた努が理沙を心配する。理沙の正面から語りかけるような体勢になった努は、理沙の顔が目に入り、真っ赤なのに気づく。

理沙「んなぁ！？　別に赤くなってなんかないわよ！　き、気のせいじゃない？」

またもそっぽを向く理沙。しかし、向いた先にはニヤニヤしながらやり取りを眺めていた響がいた。努の言葉から理沙がどのような状態かを判断したのだろう。それを視界に納めた理沙は一瞬硬直し、顔のやり場に困り、結局俯いてしまった。

努「そうかぁ？　ならいいけどよ」

何でそんなにむきになっているのか分からない努は、とりあえず納得することにする。

棗「理紗ちゃん？　ケガはないですか？」

遅れて駆け付けた棗が問う。必死に駆け付けたのだろう、若干息が上がっている。その顔には純粋に心配の念が窺えた。炎に包まれていて決着の状況が分からず、さらに理沙が気絶していたので、かなり心配をかけてしまったらしい。

理沙「ええ、大丈夫よ棗。まだちょっと体が痺れてるくらいだから」

棗の心配そうな表情に、流石に俯いて受け答えできないのか、顔を上げて答える。心配をかけた棗に元気な顔を見せる、理沙なりの

感謝の表わしなのかもしれない。

棗「よかったぁ。でも念のため回復魔法かけときますね。来て、シルヴィス！」

そんな理沙の表情を見て、安堵の表情を見せながらも、棗が自分の魔導媒体を呼び出す。声をかけると髪に付けていた鳥の羽の髪飾りが光る。その光がおさまると、先端に透明な水晶のようなものが付いており、その周りを羽のようなもので囲った杖が出現する。持ち手の部分は、白い金属に金の装飾が施された、どこか神秘的な杖である。

棗「彼のものに癒しの恵みを与えん！　ヒールライト」

その杖を自分の胸の前に抱え、短い詠唱を終えると、杖の先端に魔法陣が展開する。そこからやさしい光が漏れ、杖を理沙に向けて、魔導を発動させた。

３０秒程その光に当たった理沙は「ありがとう、棗。もう大丈夫よ」と言って、立ち上がった。その様子から、痺れや傷と言ったものはすべて残っていないらしい。

響（水と光の応用回復魔導か。この年で２種類の系統を使えるとは、才能があるな）

ヒールライト、水と光系統の中級魔導である。水系統による体力の回復・強化、光系統による身体異常の排除を同時に行う魔導である。２つの系統を組み合わせるだけあり、それなりに取得難度の高い魔導である。

響は、今使われた棗の回復魔導を冷静に分析し、棗の実力を測っていた。ほとんどの場合、自分の得意属性は1種類であり、その他の属性魔導は努力次第では使えるが一流には成り得ない。学生レベルでは自分の得意属性を向上させるのが一般的である。しかし、例外は存在し、1人で何種類の得意属性を持っている者も存在する。おそらく棗もこの部類だろう。

心「全く。女の子相手なんですから、少しは手加減して下さいよ、兄さん」

響「いやいや。目の前に炎を撒き散らしながら殴りかかってくる奴に手加減なんてできんだろ。まぁ何にせよ、賭けは俺の勝ちだな？理沙」

自らのトラウマを目の前にし、手加減などできるはずもない。今できる全力を響は出していた。きっと心が理沙と対決していたとしても、響と同じように全力で戦っただろう。それだけ理沙の戦闘スタイルは、彼らの姉に酷似していたのである。

咎める心に返答した後、さらに理沙に残酷な現実を叩きつける響。ニヤッとした笑みは理沙の反応を見て楽しんでいる顔だった。隣では心が額を抑え溜息を吐いていた。

理沙「くっ！　好きにすればいいじゃない！！」

響「じゃあ、とりあえず保留で。ま、そのうち何かお願いするとしよう」

そんなことを言う響だが、当事者の理沙にしてみればたまったものではない。いつ何を命令されるのか、その時のことを考え不安で顔を青くする。無論響は、そんな理沙の反応を計算づくでそんなこ

とを言ったのだが、理沙はそんなこと気付かない。

一心「とりあえず、お互いの実力はわかったかの？」

傍観していた一心が声をかける。重みのあるその声に「はい」と答え一同は再び整列した。それまでの雰囲気はすでになくなっている。この気持ちの切り替えの早さが、彼らが優秀と呼ばれる一つの要素になっているのは間違いないだろう。

一心「これからはこの班で活動してもらうことになる。皆仲良くするように。」

一心の問いに了解の返事を返す響たち。一心に言われるまでもなく、すでに打ち解けているようである。それは先程までのやり取りを見ていれば分かることである。

一心「さて、そろそろ疑問に思ってる者もいると思うが、何故今回このように我が学園の実力者を一つの班にまとめたのかを説明する」

その言葉に少し息を飲む5人。普通、実力者はバラバラに配属される。これは全体のレベルを向上させるためであり、また権力の一極集中を避けるためだ。しかし、今回の班構成は明らかに異常である。

一心「お前たちは最近世界のいろんなところで妖魔の出現率が高くなっていることは知っておるかの？」

5人は一斉に頷く。

妖魔、魔族の使いとも呼ばれる彼らは、生物学的上、生物ではない。俗に言う思念体である。現界と魔界、2つの世界に別れたと言

っても、境界線は存在し、穴もある。現に、この藤歌学園こそが、２世界の境界点の一つであることは既に説明したとおりである。そのような場所から、魔界の瘴気が流れ込み、人の負の感情と結びつき、妖魔が出来上がるのだ。

一心「そこで今回、我が学園はお前たちに学園の防衛を頼みたいと思う」

理沙「え！？　妖魔からの学園の防衛ですか！？　それは魔導教会や先生方の仕事で学生レベルの依頼じゃないですよ？」

一心の言葉に理沙が声をあげた。その疑問は当然。彼らは実力はあるが、まだ魔導士の卵である。何より子供なのだ。今まで妖魔の相手をしたこともなければ、本物の実戦経験があるわけでもない。

一心「うむ、本来はそうじゃ。しかし、妖魔の発生件数の増加や魔導犯罪の対応で魔導教会は人手不足なのが現状なのじゃ。妖魔発生の報せを出しても魔導士が派遣されるまで３０分はかかる。それでは被害が拡がる一方でな。もちろん各先生方も対応はするが、それでも人出不足には変わりない」

響「なるほど、一般の学生には妖魔との戦闘は辛い。そこで俺達が選ばれたと言う訳ですか」

一心の言葉に響が言う。予めこのような展開になることを聞かされていた響にとっては、驚きなどと言う感情はなかった。一心の言葉の意味を、他の班員にも分かりやすくするために尋ね返したのだ。

一心「そうじゃ。無論、無理はしなくて良い。魔導教会の魔導士が来るまでの時間稼ぎと考えてくれればそれでいい。特別任務扱いで

報酬もでるしの。どうじゃ？　やってくれるかの？」
響「わかりました。俺でいいのなら引き受けます」
心「私も兄さんと同じで力になります」
一心の問いに即答する神楽坂兄弟。彼らに迷いはなかった。
一心「後の3人はどうじゃ？」
2人の言葉に満足そうに頷きながら後の3人を見回す。視線を受けた3人は、お互いに顔を見合わせ、同時に頷く。
努「わかりました。俺は引き受けます」
理沙「私もよ。この力が誰かの助けになるのなら」
棗「あの、私も及ばずながらお手伝いさせていただきます」
各々の思いを述べながら3人は承諾の返事を返す。決意した表情を顔に出す3人。この瞬間が、5人が本当に仲間になった時だったのかもしれない。
一心「そうか、すまんの、危険な依頼をして。学園もお前さんらをサポートするからの。風紀委員の仕事もこなしながらだときついとは思うが、頼んだぞ」
5人「「はい」」
一心「うむ、いい返事じゃ。それでは今日はこれで解散とする。各自疲れをとって明日からの活動に備えておくように」
そう言って一心は訓練場を後にした。その顔は満面の笑みであっ

た。新たな時代を担う子供たちの成長を喜ぶように。

努「しっかし、なんか大事になってきたな」

学園からの帰り道に努が切り出した。太陽は既に沈み、街灯や民家の光により照らされた道を歩いている。大通りはそれなりに発展しており、この時間でも人気は多いが、住宅地のあるこの区画は人通りが少ない。周辺を見ても、歩いているのは響たちだけだ。

棗「そうですね。こんな話になるなんて思ってもみませんでした。本当に私達で大丈夫でしょうか？」

歩きながら棗が返事をする。これから先のことを考え不安になったのだろう。魔導師としての腕は一流でも、やはりまだ高校生である。ましてや女の子。与えられた役割を不安に思ってしまってもしょうがない。

響「大丈夫だよ、棗ちゃん。君は1人じゃない、俺たちと一緒に頑張るんだ。嬉しいことなら分かち合う、辛いことがあれば支える、強敵が立ちふさがるなら協力する。それが仲間だろ。前向きに行こうぜ」

そんな棗の不安を和らげるように響が声をかける。自分たちは仲間だと、友達だと。その言葉に目を丸くして呆然とした棗は、次の瞬間にはクスクスと笑い声を漏らしていた。

理沙「はぁ、それもそうね。今日転校してきた奴が言うセリフじゃないと思うけど。あんたを見てると本当になんとかなるような気が

するわ」

呆れ顔で出返す理沙に「だろ？」っと笑顔で返す響。呆れた顔をしていても、何かが吹っ切れた表情である。

努「ま、今更慌ててもしょうがないし、家に帰って風呂入って飯食ってさっさと寝るか！　そうゆう訳で　響、心ちゃん、明日からもよろしくな。じゃ、俺は先に帰るわ！」

5人はいつの間にか十字路に差し掛かっていたようである。ここで5人はそれぞれの帰路に分かれるのだ。転校してきた2人に挨拶し、片手を挙げながら走り去っていく努。十字路をそのまま真直ぐと駆けて行った。

心「あはは、努さんらしいですね」

理沙「そうね。それじゃ棗。私たちも帰りましょう。響に心、また明日学園で」

棗「お先に失礼します」

そう言って去っていく理沙を、こちらに頭を一度下げてから棗が追って行った。2人は家が近所なので同じ帰り道らしい。十字路を右に曲がっていく。

響「おう、また明日な！」

理沙と棗の挨拶に響が答える。右手を挙げて笑顔になる。その隣では心が棗に手を振っていた。

心「皆良い方たちでよかったですね、兄さん」

先ほどとはうって変わり、5人でいたときほど騒がしくはない2人での帰り道。耳を澄ませば虫の鳴き声が聞こえてくる。もうすぐ夏である。心が響に声をかけたのは、十字路を左に曲がり少し進んだ頃だった。

響「ああ、そうだな。俺達は何としてでもあの笑顔を守らなくちゃな」

改めて今回の任務に対する決意をする響。任務と言っても七聖としての任務である。私情を持ち込むわけにはいかない。彼らの任務は、この世界の在り方に大きく関わるものである。下手をすれば何億、何十億の人間の命がかかっている。しかしそれでも、できる範囲で彼らを守りたい。そんな思いが響の中にはあった。

心「そうですね。私と兄さんならできますよ。きっと」

そんな兄の気持ちを理解してか、心は兄を気遣う言葉をかける。気遣うとは言っても、それは心の本心から出た言葉であり、兄と2人ならどんな困難でも乗り切れると確信していた。

そんな妹の励ましに、ヤレヤレと方を竦めて答える響。この妹に隠し事はできないな、といった様子である。

心「それはそうと兄さん。さっきの模擬戦。最後ちょっとだけ本気

をだしましたね？」

それまでの話と話題を変える心。その言葉をきっかけに2人の表情はいつものそれに戻る。

響「お前、見えてたのか？」

心の言葉に軽く驚く響。響と理沙の模擬戦は周りに展開していた理沙の炎のせいで見えなかったはずである。しかし心の発言は、しっかりと結末を見ていたというものだった。しかも自分が少しとは言え本気を出したことを言い当てられたのだ。そちらの意味でも驚きである。

心「風のあるところで私の眼を誤魔化せると思いましたか？　リミッターを付けているとはいえ、目の前の出来事くらい把握できます」

心の得意属性は『風』である。風はあらゆるところに存在する。無風といっても、人が動けば風は起きる。故に、完全に風を消し去ることは不可能と言える。心は、その風を使い離れた場所を‘視る’ことができる。実際に見るわけでなく、感じるのだ。物体によって遮られた風を頭の中で知覚し、映像へと変換する。それは風系統が得意だからと言って誰もができる芸当ではない。心だからこそ、七聖「瞬雷」の補佐である「風精」だからこそできるのだ。

響「そうだったな。ちょっと予想以上に強かったからな。あいつらいい魔導士になるぜ。きっとまだまだ強くなる」

嬉しそうに言う響。実際嬉しいのだ。可能性に満ち溢れた仲間たちの存在が。自分たちの、先人たちの思いを受け継いで育っている子供たちが。

珍しく機嫌の良い兄の姿に、自分の機嫌も良くなっていることに気がついた心は、それでも自然に溢れてくる笑みを止めることができなかった。

心「フフ、守らなきゃいけない理由が一つ増えましたね？　兄さん」

響「ああ。それじゃさっさと家に帰って飯にするか！今日は何が食いたい？」

心「そうですね～、グラタンなんてどうですか？」

響「任せろ！　じゃあ、まずは材料の調達からだな。買い物くらい手伝えよ」

心「わかってますよ。ささ、行きましょう」

その顔はまだ笑顔だった。心は、これからの学園生活を思い浮かべ、また、今日できた友達の顔を思い浮かべながら、響の腕を取り引っ張って行った。

響（お前の笑顔も守らなきゃな）

心の笑顔を見た響は内心で決意を新たにする。この笑顔を、これからあるであろう笑顔を守るために戦うと。

棗「ねぇ、理沙ちゃん？」

理沙「なに、棗？」

一方、響たちと別れて帰宅していた理沙と棗の方では、何かを考え事をしているらしい棗と、そんな棗の様子を不思議に思っていた理沙が終始無言で帰路についていた。

別れ道から家まで、ちょうど半分くらい来たとき、その沈黙は破られることになる。沈黙を破ったのは棗だった。

棗「響先輩のことなんだけど。５年前の男の子に似てないかな？」

５年前、それはこの２人にとってあまり思い出したくない過去であり、今ここにいる自分たちを形作った出来事である。理沙は、棗が５年前の話を持ち出すのは珍しい、と感じながらも、それを問いただす気にはなれなかった。棗の表情が真剣であり、今まで考えていたことに関係しているのだろう、感じ取っていたからだ。

響「響が？　確かに刀と雷を使ってたけど、もしあの子だったら今の私たちとは比べ物にならないほど強いわよ？　５年前の時点で「雷牙」っていう名持ちだしＳランク以上の実力よ。確かに響も強かったけど……」

今日の模擬戦を思い出し、若干悔しそうにしつつも響と５年前の男の子を比べる。確かに響は５年前の男の子の面影があるように感じる。しかし実力が違いすぎる。二つ名が与えられるのはＳランク以上の魔導士である。対する響はＡランク。同一人物のはずがない。

理沙「やっぱり人違いじゃないかな？」

理沙は考えた末に結論を出す。やはり実力が違いすぎるのが決め手のようだ。第一、早々都合良く5年前の恩人の一人が目の前に現れるはずがない、それが理沙の考えであった。実際には、世界は狭い、という言葉通りなのだが、理沙がそう判断するには情報が少なすぎた。

棗「そうかなぁ？　今日初めて会った時、初対面って感じがしなかったんだよね」

なおも食い下がる棗。彼女は気弱な性格だが、一度考えたことは、なかなか曲げない性格でもあった。

「そう？　う～～～ん……」

棗がここまで言うのも珍しいなと思いながら、理沙は自らの記憶を思い返す。

自分が魔導士になるきっかけを、自らの憧れの女性を、5年前の男の子を……

あの5年前の辺り一面が真っ赤に染まった世界のことを……

第8話：結成（後書き）

やっと1日目が終わった……長くね？
次回は理沙と棗の過去話です。3人称視点でなく、理沙の視点で書きたいと思っています。

第9話：5年前の決意（前書き）

お待たせしました、9話目です。
今回は過去の話ということで、理沙視点です。
七聖も一人出てきますので、ぜひお楽しみ下さい。

第9話：5年前の決意

5年前……

季節は夏、学校も夏休みに入ったばかりのころ。私と親友の棗は、少し離れた親の実家に泊まりに来ていた。都心からはそんなに離れておらず、高層ビルこそ無いが、それなりに発展した町である。都会よりも近所の人との結びつきが強く、皆人情味に溢れ、私たちにも優しく接してくれた。私は、この町のそんな雰囲気が昔から好きだった。棗は小さいころから一緒だと言うこともあり、実家へは何度か泊まり込みで遊びに来たこともあった。祖父、祖母ともに顔見知りであり、実の孫のように可愛がられている。

事件が起こったのは、泊まりに来てから3日目だった。その日はとてもよく晴れた日。雲ひとつない空、照りつける太陽光。風も吹いておらず、半袖でいても立っているだけで汗が滲み出るほどの暑さだった。周辺から聞こえてくる蝉の鳴き声が、その暑さを助長させているように感じる。正に真夏日だった。

「「行ってきま～す」」

そんな暑さに耐え切れなかった私と棗は、自転車で３０分ほど離れた場所にあるプールへと遊びに出かけることにした。小さな頃に家族で行ったことのある大型のリゾートプールである。棗と一緒に行くのは初めてだ。隣の棗も、楽しみなのか、心なしか嬉しそうだ。

「気を付けて行ってきなさい」

私たちを見送るために玄関から顔を出した祖母の声を聞きながら、

私と棗は水着の入ったバックを自転車の籠に入れて乗り、ペダルを漕いで実家を後にした。走る自転車に吹き付ける風が、妙に気持ちよかったのを鮮明に思い出せる。

プールへは問題なく着いた。３０分という距離は子供には結構な距離であり、到着する頃には汗で服が濡れていた。肌に張り付いた服がやけに気持ち悪く感じる。自転車を停めた私たちは、受付を済ませるためにプールのロビーへと向かう。この暑さだからだろう、プールにはすごい人混みができていた。このプールは地域では有名で、様々な種類のプールが楽しめることで人気がある。この混雑も納得せざるを得ない。

「すごく混んでるね、理沙ちゃん」

「そうだね、棗」

人ごみを尻目にそんな会話をしながら、受付で入場の手続きを済ませる。子供料金で５００円を支払った私たちは、そのまま更衣室へと行き、急いで着替えプールへと向かう。棗の手を引きながら入場門をくぐった私たちは、一旦立ち止まり周辺を見回す。園内の地図を確認するためだ。　地図を探すために顔を上げた瞳には、男女のカップルから私達と同じ年頃の子供達まで様々な年層の人を写した。

地図を見つけ、入るプールの順番を決めた私たちは、まずこのプールの一番人気である流れるプールへと向かう。川ような水路が円状になっており、その中を水が一定の方向に流れているものである。主に子供たちに人気があり、入っているのも私たちと同年代が多い

ようだ。

「わぁ～、冷たくて気持ちいいっ」

準備運動をして水に入った棗が感想を言う。今までこの暑さの中で30分自転車を漕いできたので、体はすっかり火照っている。棗の反応は当然だろう。私も同じように感じた。体内の熱が、水によって冷まされていく。ある程度その感覚を味わった私たちは早速泳ぐことにした。

「さ、いこ。棗。」

「うんっ！」

私たちは水の流れに身を任せて泳いでいく。水の助けがある分、普段よりも一段と早く泳げる。途中途中、混雑のせいでほかの人にぶつかりそうになるが、避けながら泳ぐ。時には流れに逆らい、時には泳ぐのをやめて水の上に浮かんだりしながら私たちはそのプールを満喫した。

ある程度楽しんだ私たちは、そのプールを後にし他のプールへと行った。海のように波打つプールや、下から噴水のように湧き出るプールなど手当たり次第に遊んでは満足していく。ウォータースライダーには身長制限で滑れなかったのが心残りだった。その他にも、実家を出る時にもらったお小遣いでアイスクリームを買って、二人で食べ比べなどをした。

それは突然の出来事だった。

現在の時刻は午後3時。まだ外は明るいが、一通り遊んでプールを満喫した私たちは「そろそろ帰ろうか」などどプールサイドに座りながら話していた。まだまだ遊んでいたいが、水中での運動は結構体力を使うため2人はもうヘトヘトである。

「そうだね。少し早いけど帰ろ！　理沙ちゃん」

棗がそう言いながら膝に手をつき立ち上がった。

その瞬間。

ブォン

鈍い音を立てて世界が変わる。世界が侵食される。

夕焼け以上に空が赤い世界に。まるでそれは血のように。

周囲では大人が「なんだ、どうした！？」「これは・・結界か！？」などと言う声が聞こえてくる。大人たちですらパニックを起こしているのだ、理沙たちやその他の子供たちは、どうしたらいいのか分からずにオロオロするしかない。

「理紗ちゃん・・・」

「棗、私のそばを離れないでね」

心配そうな棗を安心させるように手を握りながら私は言った。正直な話、私自身も不安でしょうがなく、棗の手を握ったと言ってもいい。とにかくこの時は、得体の知れない状況で、心が押し潰されそうだったのを覚えている。

その時

「妖魔だ！！　妖魔がでたぞーー！！」

広場にいた男性が、ある方向を指さしながら叫んだ。その声と同時に広場にいた人は皆、指の先の方向を向く。私もその動きにつられ見ると、魔法陣の上に5メートル位の身長で、全身黒で目が赤く、鋭く発達した爪に尻尾を持った異形の生物がいた。

（妖魔？　いや違う、あれは妖魔なんかじゃない）

その異形の姿を見た当時の私は直感的に考えていた。両親が魔導協会に務めているため、私は実際に見たことはないが、妖魔の知識を持っていた。しかし、目の前にいる異形は、その知識には当てはまらないものだった。

（妖魔の身長は3メートルくらいのはず。前身は黒いけど、その姿は人間に酷似している。人の負の感情を元にしているのだから、人間に似ていなければおかしい）

目の前のそれはどうだ。改めて顔をよく見ると、耳が尖っており、目は獣のように縦に瞳孔が開いている。口は狼のように伸び、鋭い歯が覗く。先ほど見た尻尾と爪を合わせると、人間とは到底思えない姿形である。

（……悪魔？）

私の脳裏に一つの単語が奔（はし）る。それは、この世界に存在するはずのない者。かつて魔界へと封じられた者の名だった。そこまで考え

て、私は思考を中断せざるを得なかった。

「グゥゥゥゥォォォオオオ！！」

その異形が咆哮をあげ、大気が震えたためだ。ただの遠吠えで背筋が凍るほどの力を感じる。あれに関わってはいけない。私の中の直感が、そう告げていた。

「クソッ！！」

異形の遠吠えを合図に、何人かの男の人が魔導を展開・発動させ、1人の大剣を持った男が切りかかる。おそらく休暇中の魔導教会の者だろう。火の玉が、雷が、氷の槍が異形へと殺到する。命中した魔導は、大したダメージを与えないものの、異形の体勢を崩し、大剣を持った男が切りかかる時間を稼ぐことができた。大剣の男は勝利を確信し、叫ぶ。

「もらったーー！！　な！？」

しかしその瞬間、横からの衝撃により男が吹き飛ぶ。まるで重さがなくなったかのように一直線に飛んで行った男は、そのままプールの水面へと叩きつけられ動かなくなった。その光景を目の当たりにした人々はさらに混乱する。一番混乱していたのは魔導を放った者たちだろう。

「なに！？　一匹じゃなかったのか？」

そこには同じ異形がいた。1匹目と姿形の全く同じ異形。ここに現れたのは1匹だけではなかったのだ。魔導士達は、2匹を相手にするために、各々の魔導媒体を構え戦闘態勢に入る。しかし……

「こっちにも出たぞ～～」
「こっちもだ！！　逃げろー」

まるで示し合わせたかのように、２匹目の出現と共に、３匹目、４匹目とその姿を増やしていく異形。プールのあちこちで叫び声が上がり始める。それを合図にしたように、プールに来ていた客が一斉に逃げ始めた。人の波が目指すのは、園内の出口。この園内に出入り口は一つしかないので、結果的にそこを目指すしかないのである。

「棗、私たちも逃げるよ！」
「う、うん！！」

その光景を見て若干呆然としていた私と棗は正気を取り戻し、私は棗の手を引いて逃げ出す。いつまでも同じところに留まっているわけにはいかない、その思いで必死に走り始める。とりあえず私たちも何も考えずにプールの出口へと向かっていくしかないようだった。

しかし・・・

「なんだよ、これ！！　見えない壁があるぞ！？」

先陣を走っていた人たちが何かを叩きながら叫ぶ。それはちょうど赤い結界の境目。どうやら外の世界には出れないようである。プールの出口には、結界のせいで出るに出られない客で混雑していた。

その周辺に突如さっきの魔法陣が展開され、異形が出現する。広場で見たものと同じ姿の異形だ。

「グゥゥゥゥゥゥォォォォォォ！！」

「うわぁ～、逃げろ」

「押すんじゃねぇ」

異形の出現に混乱する人々が同時に逃げ惑う。そんな状態で、まともな非難ができるわけがない。ある者は押し合い、ある者は突き飛ばされ、ある者は脅え立ちすくむ。そんな人間たちの集団に、異形はその身に似合わぬ跳躍力を示し、割って入る。

突然の異形の襲撃に、ある者はその大きい体に押しつぶされ、ある者は爪で切り裂かれ、ある者は尻尾で薙ぎ払われる。その時間はわずか数秒。次の瞬間には、異形を中心とし、倒れた人山ができあがる。まだ息がある者もいるのか、痛みに耐えながら必死に逃れようとしている。しかし、その抵抗も無駄に終わった。異形が己の爪でトドメを刺したからだ。

「棗、こっち！！」

その光景を見た私は泣きそうになりながらも、なんとか気を保ち、再び棗の手を引き逃げる。棗も必死に目を逸らしながらも走ろうとするが、足を縺(もつ)れさせる。

「理沙ちゃん、私もう走れないよ・・・」

今日は1日プールで遊んだ後である。かなりの疲労が溜まっていたのだろう。もともと棗は運動が苦手である。出口に来るまでの走りでも、良く持った方だろう。

「分かった。あの草陰に隠れよう」

そう言って指を指したのは、人2人をなんとか覆い隠せるくらいの草陰である。走るのが無理なら隠れるしかない。私たちは異形が迫ってくる前に急いで、その草陰に飛び込んだ。

「理沙ちゃん、これからどうするの・・・」
「しっ！絶対声を出しちゃだめよ。泣き声も！」

泣きそうな声で尋ねる棗に私は言う。今は異形に私たちの居場所を知られるわけにはいかない。もしバレれば……その先は言わなくても予想できる。棗も私の言葉の意味を理解したのか、しきりに頷く。そのまま私たちは、体を丸くし、二人で抱き合って身を寄せる。お互いに震えながら。

遠くからは人の悲鳴や異形の咆哮がしきりにあがっている。魔導の炸裂音、何かの破壊音、それらが聞こえるたびに、私たちはビクッ、ビクッと体を震わせていた。時折近くを人や異形が通るが、私たちには気付かずに通り過ぎる。嫌な汗が背中を伝い、流れ落ちる。私たちにできることは、震えながら、過ぎ去る時間を待つだけであった。

それからどれくらいの時間がたったのだろう。実際には20分くらいしかたっていなかったが、私たちにはそれが永遠と言っても過言ではない時間だった。全身に冷や汗をかき、ギュッと瞑った目は赤く充血している。知らず知らずの内に泣いていたらしい。

あたりは静寂に包まれ、魔導の炸裂音も何かの破壊音も、人の叫

びも妖魔の咆哮も聞こえない。

「棗、少し外に出てみよう？」

私の声に頷くことで答える棗。いつまでもここに居ても助かる保証はない。少なくとも周囲の状況を把握したかった。狭い場所で、いつ来るとも知れない恐怖に、精神的に限界が来ていたのも事実である。

そうして私たちは音をたてないようにゆっくりと外に出た。茂みから頭を出す。

まず目に入って来たのは、見渡す限りに広がる人だったものの残骸。所々に人だと判断できるパーツが転がっている。それと赤い液体。地面を伝い、いたるところに水たまりを作っている。

次に目に入ったのは赤いままの空。結界はまだ解除されていないようだ。空も建物も地面も赤一色。

見渡す限りの『赤』

赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤

私たちの心にはその色が深く刻まれる。呼吸が荒くなる。鼓動が大きくなる。脳が状況の理解を拒絶する。しかし心だけは、それを現実として受け止める。受け止めてしまった。

「いやぁぁぁぁぁあああ！！！」

棗がその光景に耐えられなかったのか叫ぶ。甲高い絶叫が園内に響き渡る。頭に手を当て、頭（かぶり）を振りながら、その場に尻もちをつくように座り込む。当たり前である。まだ幼い少女がこの光景に耐え

られるはずがない。きっと私も棗がいなかったら叫び散らしていただろう。棗が先に叫んだ分、私は冷静になることができた。いや、冷静になんてなれるはずがない。しかし、今棗を守れるのは自分だけだ。それだけを考え、恐怖を抑え込む。

そこには命がなかった。人の営みがなかった。
さっきまであんなにいたカップルも、同年代の子供も何もかも……
本来あるはずの笑顔も、会話も、物音も……
ただただ広がる赤い世界。

「棗、落ち着いて！！」

私は必死に棗を落ち着かせることにした。まだあの異形がいなくなったと決まったわけではない。いつ、さっきの叫び声を聞きつけるか分からない。すぐにこの場を離れなくては。必死に無理やり作った心の余裕で、考えられることを考える。

しかし、それは遅かった。

「グゥゥゥゥゥォォォォオオオオ！！」

棗の声を聞きつけた異形が3体こちらに向かってくる。爪を振り上げ、牙を覗かせ、駆けてくる。

「棗、逃げるよ！！」
「ダメ・・立てないよぅ」

その姿を確認した私は、棗に逃げようと声をかけるが、腰を抜かしたらしい棗は、その場で座り込んで逃げられないようだった。立ち上がることすら難しそうだ。

その間にも異形が迫ってくる。
「理沙ちゃんだけでも逃げて」
「馬鹿！！　そんなことできるわけないでしょ！」
棗の言葉に瞬間的に怒りながら、私は棗を抱えようとする。
「オオオオオオオ！！」
しかし、その瞬間には目の前まで迫った異形が右手を振り上げていた。
「っ！？」
「く！！」
咄嗟に目を瞑る棗をかばうように私は棗を抱き寄せる。脳内には妖魔の爪で貫かれる自分たちの姿が鮮明に想像できた。私たちはここで死ぬ。意外と冷静に自分の死を認めていた。
ガキィィィィン
「「？？？」」
自分たちの肉体を貫いたとは思えぬ甲高い音。そして、いつまでたっても来ない痛みと衝撃に瞑っていた目をあける。そこで予想外のものを見ることになった。
「ギリギリセーフかな？　まだ生存者がいたなんて。大丈夫？　２人とも」

目の前には刀で爪を受け止めた少年が立っていた。私たちとほとんど変わらない年齢の男の子。まだ成長しきっていない体のどこにそんな力があるのか。異形と少年の力は拮抗していた。それを信じられないものを見る目で見る私たち。

「危ないから、そこから動かないでね」

そう言って少年が妖魔の爪を押し返し距離を取り、その体に雷を纏い始める。私たちはそれを呆然と見ていることしかできない。まだ脳が現実の処理に追い付いていなかった。雷を纏った少年は刀を下段に構え、腰を落とす。右足を引き半身になる。

先に動いたのは少年だった、3匹のうち中央の1匹に雷撃を繰り出す。詠唱を破棄した下級魔導魔導、「ライトニング」。あまりの術式展開速度に異形はついていけなかった。無防備な体に電撃が命中する。それを浴びた異形は痺れて動けなくなる。

それを好機をし、残り2匹に向かっていく少年。今度は異形も黙ってはいない。それを迎え撃つ姿勢を取る。瞬時に距離を詰めた両者はぶつかり合う。

異形は爪を大振りし、尻尾を薙ぎ払い、時には牙を突き出し攻撃する。2匹での連携は意外なことに無駄がなかった。まるで意志の統率ができているようである。

しかし、信じられないのは少年の技量だった。妖魔の攻撃を軽いものは受け止め、大きいものは回避、受け流し、できた隙に刀で、雷で攻撃し傷を負わせていく。決して深追いはせずに、着々とダメージを与えていく。瞬時に状況を判断、適切な行動を選択していく。2対1の不利をものともせずに少年は闘っていく。

「すごい……」

魔導を学んでいない私たちにも、そのすごさは見ただけで分かった。知らず知らずに口から賞賛の言葉が漏れる。
しかし、最初に雷を浴びせて動けなくなったはずの異形が、動きを取り戻し後ろから少年に接近する。少年はまだ気づいていないようだ。ここで見ていた私たちだからこそ気付いたのだろう。

「危ないっ！」

咄嗟に叫ぶが少し遅い。妖魔の爪が少年へと吸い込まれていく。

「全く。いつも言ってるだろう？　動きを奪っても最後まで気を抜くんじゃないと」

瞬間そんな女性の声が聞こえてきて、少年の背後にいた妖魔が吹き飛んだ。吹き飛んだだけではない。それはいきなり空中で発火し、塵一つ残さずに燃え尽きた。その女性は『赤い』髪を靡(なび)かせながら、さっそうと戦場へと足を踏み入れる。私たちの横まで来たと思うと、顔を私たちに向け、ウインクを一つした。もちろん飛びっきりの笑顔である。その表情を見た瞬間、得体のしれない不安は消え去り、なぜか絶対的な安心感に包まれたような気がした。

「姉さんがいたのには気づいてましたから、でも一応ありがとうございます」

それに気づいた少年は、突然の仲間の撃破に動きの止まった異形を置き去りに、跳躍。一足で私たちのいる位置まで後退してきた。女性の姿を確認し、事も無げに礼を述べる。

「はぁ、可愛くない弟分だねぇ。後は私にまかせな。アンタはこの子たちの護衛」

赤い髪の女性は、親指で私たちを指し、少年に指示を出す。その女性の言葉に反論もないのか、「分かりました」と答えた少年が私たちのそばに来る。その表情は戦闘時の表情とは違い、どこか気の抜けた表情である。私は不思議に思った。何故戦闘中なのに、こんなにも気を抜いているのだろうと。その答えはすぐに思い知ることになった。

「もう大丈夫。もうじき助かるよ」

そう言って自分たちの周囲に防御結界を展開する少年。白い光の膜が私たちを包むようにして広がった。

それを確認した女性が両手を左右に広げるような動作を見せる。袖からは金色の腕輪が見えた。

「灰塵(かいじん)と化せ、陽炎(かげろう)」

女性は自らの相棒を呼び出す。女性を中心に炎が巻き起こる。それが両手両足に収束し、形を為す。赤と黒のコントラストの手甲、脚甲。神具「絶手脚甲陽炎」

「……七……聖……」

今日何度目か分からない驚きの言葉。目の前にいるのは、世界の魔導士でもトップに君臨する七人の内の一人。その正体は不明であるが、彼らが使う、神具と呼ばれる魔導媒体が証となる。昔父さん

が私にしてくれた話である。彼らは大きなる力を持って、私たちを守護する存在。魔導士は、彼らの言葉には従う義務があるのだと。

「さぁて！！　アンタ等には罰を与えないとねぇ」

そう言って彼女は、左右の腕に装着した手甲を、胸の前で打ち鳴らす。それと同時に、全身に炎を纏う。

赤、一瞬心にその色がよぎる。人の血、赤い空。今日起こったいやなことがすべて赤と言う色に集約される。

しかし、この日最後に見た強烈な「赤」はそんなことを一切感じさせず、ただ温かかった。生命の鼓動。それを感じさせる。きっと私たちが「赤」と言う色に対しトラウマにならなかったのは彼女のおかげだと確信できる。

2体の異形が同時に彼女、七聖「獄炎」に襲いかかる。それがいかに無謀なことであるかを知らずに。

「うぜぇ！！」

彼女が右手を左へと振るう。腕の延長上に炎が帯を引くように広がる。

ただそれだけ。ただそれだけで2体の異形が炎の中に消える。炎がなくなるとそこには何もいなかった。塵一つ。

すると、魔力を感じたのか奥からさらに8体の異形がやってくる。それだけでない、どうやら妖魔と思われる者も何十匹と群れてやってきた。異形に率いられる形で私たちに向かってくる。

「「っ！？」」

息をのむ私と棗。こんなにも多くの異形がいたのか。

「おうおう！　わらわらと群がりやがって。」

私たちの思いと裏腹に、余裕の表情を崩さない彼女。楽しそうな言葉と同時に右手を頭上に上げる。

「汝、その身に罪を宿しし者よ　我が身に宿るは断罪の業火　其の業火を以って罪ある魂に判決を下せ　我が前に顕現せよ」

今まで聞いたことのない詠唱を終え右手に巨大な魔法陣が展開、そこから膨大な魔力が解放された。その腕を最後の言葉と同時に、振り下ろす。

「罪裁く断罪の焔（パニッシュメントフレイム）」

周辺すべてを炎が覆っていく。私たちにも、その炎が迫り、飲み込まれる。しかし、その炎は何も燃やさなかった。木も建物も何も。不思議な温かさ、優しさが炎から感じられた。しかしその炎に異形が、妖魔が触れた瞬間、それらはこの世界から存在を焼き尽くされる。断末魔を上げることも許されず、激しく燃焼する。それは一瞬の出来事だった。襲ってきた異形たちは跡形もなく消え、静寂が周囲に戻る。

ブォン

すると、空を覆っていた赤い結界が解け、元の青い空が戻っていく。それを座り込みながら見ていた私たちは、ようやく助かったことを実感できた。体にドッと疲れが押し寄せる。気を抜いたら気絶

するのではと思うほどだった。

「チィッ、首謀者は逃がしたか」

解かれていく結界を見ながら、悔しそうにそう言って武装を解く女性。そしてそのまま踵を返し、何も言わずに去っていく。

「すぐに魔導教会の人が保護に来ますので指示に従ってください」

そばにいた少年もそう言って私たちの元を離れる。先行する女性を追って脇に並ぶ。

「ま、待って下さい、あの、名前は？」

そいって咄嗟に私は引き止める。まだお礼すら言っていない。

その言葉に立ち止まり振り返る2人。

「魔導教会所属　七聖が一人「獄炎」だ」

「その補佐で「雷牙」です。悪いけど、名前はお教えできません。機密事項なので」

そう言って再び去っていくその姿を、見えなくなるまで私たちは頭を下げ続けた。

その後すぐに魔導教会の魔導士が来て、私たちは保護された。どうやらあの赤い結界が解けたおかげで、ようやく中に入れたらしい。

後から聞いた話によると、あの事件は赤い結界の中に七聖「獄炎」「斬鉄」「荊姫」の3名とその補佐が単独で侵入、異形と妖魔のほ

とんどを殲滅したらしい。しかし、目撃情報にあった異形を召喚した男性は確保できずに逃走、行方を眩ませたらしい。この事件はテレビなどの報道機関で大々的に放送された。生存者は２０名ほどで、死者は千名以上だったとされる。

そして現在に戻る。すっかり暗くなった夜道を歩きながら、私は回想の世界から戻ってきた。

「やっぱり気のせいじゃない？　それに、そんなに都合よくあの男の子が転校してくるわけないじゃん」

私は5年前を思い出し、改めてそう告げる。「雷牙」と響は似ているようで違うような気がする。「雷牙」はもっと礼儀正しかったし。響は性格悪いし。今日のことを思い出したら腹が立ってきた。

「そうかなぁ～？」

しかし、それでもまだ納得できないらしい棗。そんな棗に溜息を一つ吐き、若干呆れる。いつまでも考えているのは私の性に合わない。

「ま、考えてても分からないし、響に直接聞いてみれば？」

それが一番手っ取り早いと考え私は言った。案の定、棗はポカンとした表情をした後、慌てて首を振る。

「え、え～。そんなことできないよぅ」

「全く、度胸がないわね。あ～もう、ほら。考えてても仕方ないんだから、さっさと帰ろう」

そう言ってあの時と同じように棗の手を引く。違うのは二人が笑顔であるということだ。5年前の出来事は、決して忘れられるものではないだろう。でも私たちは今を生きている。助けてもらったこの命だから、今を精いっぱい生きよう。

「わわ！！まってよ、理沙ちゃん。」

転びそうになりながらも付いてくる棗。その姿に笑い出しそうになりながら何とか堪える。

私と棗はあの事件の後に二人で話し合った。私達と同じような人をこれ以上増やさないために、私たちは魔導士になろうと。あの七聖「獄炎」の女性やその補佐の少年のように、誰かを守れるようになろうと。あの時の気持ちは今も変わらず、私たちは走り続ける。あの人たちに追いつけるように。

「ようし、こっから私の家まで競争ね。負けた方が勝った方に明日のランチ後のデザート奢ること。よ～い、ドン」

そう言って私は棗を置き去りにして走り出す。

「え？ウソ！？ちょっとずるいよ、理沙ちゃ～ん」

慌てる棗を尻目に私は駆ける。

何よりも大切な、この時間を守るために・・・

第9話：5年前の決意（後書き）

灯さん強すぎ……

表現とかどうでしたか？

感想やアドバイスお待ちしております。

次回は用語集を作るつもりです。お楽しみに

第１０話：弄り弄られ（前書き）

更新速度が……

何とかせねば

第１０話：弄り弄られ

次の日の朝。

太陽が昇り始め、辺りが徐々に明るくなってきた頃。いつものように目覚まし時計の音で5時に起きた響は、蒲団から這い出て軽く体を動かし、活動を開始した。学校に行くだけなら、こんな時間に起きる必要はない。朝食を作るにしても、後1時間は寝ていられる。ならば何故こんな時間に起きているのか。

「昨日は一昨日疲れてたから、日保ちするもので弁当作っといたけど、毎日そんなわけにはいかんしな」

今日からは朝食の他にも、弁当を作らなくてはならないからだ。日保ちするもので昨日のうちに弁当を作っておけば朝は楽だが、それでは栄養が偏ってしまうのである。体調管理ができなくては、いざという時に任務に支障をきたしてしまう可能性がある。

「まぁ、料理は楽しいし。今日は何を作ってやろうかな……」

そう言って冷蔵庫の中を確認し、思案する響。料理は彼にとって半ば趣味のようなものになっているようだ。近頃の下手な奥さんよりも主婦が板についてるのは気のせいではないだろう。響きは口笛を吹きながら、冷蔵庫から取り出した食材の調理に取り掛かった。

楽しみながら朝食を作っていた響は、ふと壁にかけられている時計を確認する。時計の針は7時を指していた。窓からは光が射し込

み、外からは鳥たちのさえずりが聞こえてくる。天気予報では、しばらくは晴れの日が続くとのことだったので、今日も1日晴れるのだろう。焼いていた鮭を皿に移しながら思考する。

「そろそろ心が起きてくるかな？」

皿によそい、出来立ての朝食をテーブルに並べていく。居間にある足の低いテーブルには2人分の朝食が並べられていた。今日の朝食は、ご飯に味噌汁、鮭の塩焼きと模範的なまでの和食である。心が洋食よりも和食派なので、神楽坂家の朝食は比較的和食が多い。響としても、朝はパンなどよりも白米を食べたい人なので、それに対し不満は一切ない。まだ温かいため湯気が立ち昇っている。

しかし……

「遅いな？　いつもは何も言わなくても勝手に起きてくるのに」

待っても心が起きてこないことを疑問に思う響。心はいつも起こさなくても、謀っているかのように朝食までには起きて席に着いているのが日常である。そんな心が今日は起きてこない。一通り朝食の準備を終えた響は、その朝食に手をつけるでもなく、心のことを考えていた。

「そろそろ起きないと遅刻だな。しゃーない、起こしに行くか……」

昨日は初めての学園だったので疲れて寝坊でもしたのか、と考えに至った響は心の部屋に向かって行った。

階段を上って突き当りにある心の寝室前に響はいる。ドアの真ん中あたりには、心の部屋、と書かれたプレートがぶら下がいる。その下には小さくともしっかりと読み取れる大きさで、用があるときはノックをするように、と書かれていた。

「心〜？　起きてるかぁ。入るぞ〜」

そんなプレートを特に気にかけるでもなくスルーして入室する響。その行動には躊躇という態度が感じられなかった。プレートの意味がまるで無しである。

「そろそろ起きないと遅刻するぞ〜」

「……」

部屋の中には、いかにも女の子らしい光景が広がっていた。白い壁地に、ピンクのカーテンが良く映える。机や本棚の上には、クマや犬、猫といったヌイグルミがいくつか置いてある。

そんな部屋の突き当りのベッドに心は布団をかけて寝ていた。顔は反対側を向いており、肌蹴（はだけ）そうなタオルケットを腕で強引に抱え込み、膝を丸め体を小さくしながら横になっている。

「珍しいな？　心が寝坊なんて。おーい、心」

そう言い部屋の中へと足を踏み入れる。そのまま何を気にするでもなく響はベットの前まで一直線に歩み寄る。未だに反応のない心を一瞥し、その顔を覗き込むように見る。

「おい、心？　起きろ〜！　遅刻するぞ？」

そして心の肩を掴み、揺すりながら起こそうとする。ぐらぐらと

揺れる心の体。大抵の人ならこれで起きるはず。しかし……

「う～ん……」

それでも起きない心。あろうことか寝返りを打ち、揺すっていた響の手を払いのけようとする。そんな心の様子に、どうしたものか、と考えていた響は、ある事に気づく。

ーーーーピクピク

心の鼻の脇辺りが、ピクピクと震えたのだ。

（コイツ、もしかして・・・）

過去の経験から、この行動の理由に思い立った響は、心に悟らせないように少し考え、行動に移す。

「ふむ、熟睡してるな？　このままでは2人とも遅刻してしまう。我が妹よ。お前の犠牲は無駄にはしない！！」

そう言って踵を返し、入ってきたドアに向かってドアを閉める。

バタンッ

ドアが激しくしまる音がするとともに、一瞬の静寂が訪れる。だが次の瞬間。

「え！？　ちょっと待ってよ兄さん！？　起きてる！　起きてますってばぁ」

ベッドから飛び起きる心。まるで最初から起きていたかのようにベッドから飛び降りる。寝起きとは到底思えない動きを見せる。着地を決めた心は、部屋から出て行った兄を追おうとしてドアの方に向き直る。

そこには

「やっと起きたか、心」

ニヤニヤと笑みを浮かべた響が出迎えた。そうなることが分かっていたかのように、余裕たっぷりな兄の表情。それを見た心は、呆然とした後に状況が把握できず、疑問を口にした。

「な！？　兄さん！　部屋から出て行ったはずじゃ……まさか気づいてましたね？」

その疑問の最中に確信に気がついた心。断定したように兄に聞き返す。

「お前が嘘をつくと鼻がピクピク動くんだよ」

あっさりと真相を教えてしまう響。相変わらず表情はにやけたままだ。

「っ！？　～～～／／／」

響から真相を聞いた心は、恥ずかしいのか自らの手で鼻を隠すように抑え、顔を真っ赤にしながら兄を睨む。目は涙目で上目遣いというオマケ付きである。これが兄じゃなかったら、男にとっては凶器になっていたかもしれない。

「まぁ、起きたんなら早く飯食って学園に行くぞ」

そんな抗議の視線を、どこ吹く風という感じで受け流した響は、今度こそ部屋から出ていく。

「あ！？　置いていかないでくださいよ」

心はパジャマから急いで着替えると、授業の用意が詰まった鞄を引っ掴み、一足先に下へと降りて行った兄の姿を慌てて追いかける。リビングに着くと、冷めてしまった朝食を温めなおし席に着いた兄の姿があった。

「しかし、何で今日は狸寝入りなんてしてたんだ？」

あのあと朝食を食べて登校していた響は心に聞いた。通学路には響たち以外にも学生が通っている。学生だけでなく、スーツを着たサラリーマンなども時折目にする。そんな中をお喋りしながら歩く、1組の男女。傍から見ると、彼らはどのように見られるのだろうか。

「いえ、たまには兄さんに起こしてもらいたいなぁっと思いまして」

その言葉に響は首をかしげる。そんな兄の表情を正確に理解し、さらに言葉を続ける心。

「ほら、やっぱり憧れるじゃないですか？　兄にやさしく起こされる妹ってシチュエーション！　けっこう夢だったんですよ？」

心は満面の笑顔で今日の思惑を語る。その時の心の目が、どこか遠くを見るような、頭の中で妄想しているような目だった。おそらく実際に起こった時のことを想像しているのだろう。
心の言葉に肩を竦める響。心が考えていることと同じ想像を自分も想像してしまい、憂鬱な表情をしている。

「そりゃ、無理だ。俺のキャラじゃないだろ。ご期待に添えなくて残念だ。それに普通は逆じゃないか？　年下の妹に起こされる兄の構図だろ？　ふむ……確かにそれなら憧れるな！　まぁ、お前が俺より早起きしたのは見たことないから無理だろうが」

先ほどの想像を、自分と心の役割を逆転させて再生する。アニメなどでは一般的な光景が脳内で写され、それならと納得する。しかし、心が朝に弱いことを知っているので、あっさりとその妄想を非現実的と結論付けた。
そんな響の言葉にムッとした表情を浮かべた心は、負けじと言葉を返す。響にしてみれば自分の言葉に、どのように妹が反論するか想像に容易い。

「兄さんが早起きしすぎなんですよ！！　いいですよ、じゃあ今度は私が兄さんを起こして見せます」

案の定、予想したとおりの言葉が返ってきた。心の中で邪悪な笑みを浮かべつつも、それを表面に出さずに会話を続ける。

「お！？　そっか！　期待しないで待ってるとしよう」

息巻く心に、それを茶化すような表情を浮かべる響。響は内心で、次はどのように妹を弄るか考えていた。2人にとってはいつも通りの会話を繰り広げながら、学園についた響たちはそれぞれの教室に

向かって行った。

2人が兄弟だと知らない周りの学生に大きな誤解を残したまま……

ガラガラ

昨日から自分の教室になった場所に迷わず着いた響は、教室の後ろに位置するドアを開けて中に入る。

「あら？　おはよう、響。朝早いのね？」

「おっはー、響っち！」

そこに、既に登校していた理沙と薫が声をかけてきた。薫の挨拶が古いと感じつつも、余計なトラブルは嫌なので、あえて指摘しない。手に持っていた教科書などが詰まっている鞄を机に置きながら、2人に挨拶を返す。

「おう。おはよう理沙、薫。それを言ったらお前たちの方が早いだろ？」

「それもそうね」

あっさりと頷く理沙。実際、今日の響はクラスの中では遅いほうで（心の狸寝入りに付き合っていたので）クラスの生徒の大半が教室で雑談に耽っていた。理沙の判断基準は、遅刻するか、しないからしいい。

「ところでぇ～、昨日の放課後はどうだったの？　なんか模擬戦をやったって話を聞いたんだけど？　ホント？」

昨日の放課後は訓練場に行けなかった薫が、待ってましたと言わんばかりに聞いてくる。体を響の方へと突き出し、迫ってくる。よほど気になっているらしい。

「まったく薫は……そんな情報どこから仕入れてくるら。薫は学内の中でも情報通なの。毎回どこからともなくネタを仕入れてくるのよ」

その様子に呆れながら、理沙が薫について説明してくれる。何で模擬戦のことを知っているのが疑問だった響は、理沙の言葉に納得する。

「ああ、ホントだぜ。同じ班になるのにお互いの実力を知るためだってよ。俺と理沙、心と努でそれぞれ模擬戦をやったんだよ」

「マジで！　マジで！　それで結果は？」

薫は結果が気になるのか、さらに響に詰め寄っていく。さすがの響も薫の様子に軽く引き気味である。それを確認した薫は、1歩離れ、ワザとらしく咳払い、響に先を促す。それを受け、理沙のほうに顔を向けた響は、朝も心に見せたのと同じ、ニヤッとした笑みを浮かべる

「もちろん俺の勝ちだ。理沙も惜しかったがな。心も努に勝ったぞ」

胸を張って言った。その場合の理沙へののフォローは、理沙の傷を抉るころしか効果がない。もちろん響もそれを分かってやってい

る。

「クッ！？」

悔しさで顔を歪めつつ、響を睨む理沙。

「おお～！？　凄いね響っちと心っち。この学園でもトップの実力者の、理沙っちと努っちに勝っちゃうなんて。こりゃとんでもないライバル出現ですな？　理沙っち？」

その模擬戦の結果を聞いた薫は素直に感心していた。籐歌学園でもトップの実力を持つ２人、それに勝った響と心。内容は知らないが、自分の親友がこんなに悔しがるのを見たのは初めてである。２人ともかなりの実力者であることに間違いはないだろう。

「ふんっ！　ふんなの偶々よ！　努はともかく、私は次やったら絶対に勝つわよ」

「おんやぁ、理沙ちゃんは潔くないなぁ？……賭けの賞品、とんでもないこと要求してもいいんだぞ？」

ふてくされた態度の理沙に響は黒い笑みを浮かべながら、最後に理沙にしか聞こえないように耳打ちする。

「っ！？」

その耳打ちに、赤くなりながら響を睨む理沙。いきなり異性に耳打ちされたのもあるだろうが、それ以上に怒りの感情が上回っているらしい。まるで親の敵を見るような目で睨みつける。

「理沙っち？　どったの？」

響の言葉が聞こえていなかった薫は不思議そうに理沙に尋ねる。当然理沙としても答えられるはずがなく、自然と沈黙するしかない。

「クックック、なんでもないよなぁ？　理沙ちゃん」

その後には、笑顔の響と俯く理沙、困惑顔の薫がいた。

「そんなことより、今日の放課後、歓迎会やるから」

なんとかダメージから回復した理沙は唐突に話を切り出した。

「は？　歓迎会？　誰の？」

当然、いきなりの話題転換に思考がついていかない響。考えれば直ぐに分かりそうな事を聞き返してしまう。

「それ、本気で言ってるのですか、響っち？もちろん、響っちと心っちの歓迎会に決まってるでし」

そんな響に突っ込む薫。もはや語尾が変なのは突っ込むまい。

「そう言うこと。昨日は放課後は訓練場に集まれって言われてたからね。だから今日にしたの。ちなみに参加者は、アンタと心ちゃん、私に薫に、ついでに体力バカもね」

そう言って参加者を指折りながら挙げていく理沙。ちなみに体力

バカとは言わずもがな、努のことである。

「へぇ～、わざわざ悪いな。んで、場所はどこでやるんだよ？」

その言葉に感謝しつつ場所を尋ねる響。

その言葉に理沙が、ニヤッと先程の響のような笑みを浮かべる。

「響の家」

さっきの仕返しか、簡潔に答えた。

「へぇ～、響の家かぁ～。……ちょっとマテ、オイコラ。イマ、ナンッッタ？」

聞き間違いということにしたかった響は、咄嗟に聞き返す。内心では嫌な予感しかしなかったが。

「だから、響の家でやるの！！」

そんな響の内心を知ってか知らずか、理沙は再び答える。今度は力を込めて。

「ＯＫ、ＯＫ。百歩譲って俺のうちでやるとしよう。何で俺の家なんだ？」

現実を受け入れるのを拒否したいができない響は、困惑しながらも理由を尋ねる。

「だって、どっかの店でやると費用が高くなるし。響の家は心との２人暮らしでしょ？　その点、私たちの家だと親がいてうるさいし

ね。それに明日は学園休みだから、泊まれるしちょうどいいかなって」

それにスラスラと答える理沙。始めから考えていたのだろう。そうでなくては、ここまでスラスラと理由が言えるわけがない。

「だからって宿主の許可も取らずに計画するか？　普通」

逃げ場を求めて正論を振りかざす響。しかし、今回は理沙が上手だった。

「あら、許可なら取ったわよ？」

「はぁ？」

響の表情を見て、再び理沙がニヤっとしながら言う。

「昨日の模擬戦の後にね。心ちゃんにだけど」

その言葉に響はピキッっと固まる。まるで響だけ時間が止まったようだ。

（こ・こ・ろ～！！　帰ったら調ｋｙもといお仕置きだな・・・クケケケケ）

心の中でダークな笑いを浮かべる響。どのようなお仕置きにしようか、頭の中で考えを巡らせる。その時心が身震いしていたのは別のお話。

「まぁ～心には、響には内緒にしてって言っておいたんだけどね」

一応心のフォローを入れる理沙。しかし、響は中では、心にお仕置きするのは決定事項なので大した成果を挙げることはできなかった。

「そう言うことで、よろしくお願いしますね？　響っち」

何故か勝ち誇ったような笑みの薫が言う。傍らの理沙も、さっきのストレスを多少解消できたのか、何となくスガスガしい表情である。

「あ～もう、分かったよ！　勝手にしろ」

自棄になる響、そこに先生が教室に入ってきた。

ガラガラ

「はいはい、席に着いて。出席採るわよ？」

「じゃあ、響放課後よろしくね」

「よろしくなのですよ！」

そう言って席に戻る2人。

「おう、分かった分かった」

それを響は諦めた表情で投げやりに見送った。

ちなみに努は今日も遅刻し、担任の先生の呼び出しをくらったのは言うまでもない。

第１１話：歓迎会

時刻は放課後。今日の全ての授業が終了し、ホームルームの時間も終盤に差し掛かっていた。壇上では先生が連絡事項などを話している。響はというと、頬杖をつきながら窓の外を眺め聞き流していた。

「じゃあ、今日はここまでね。皆、また明日。気をつけて帰りなさい」

「おっしゃぁ。今週もこれで終わりだ！！」

先生の言葉によりホームルームが終わった瞬間、努が待ってましたと言わんばかりに叫んだ。今日も遅刻し、みっちりと先生に絞られた努は、歓迎会のことを聞くや否や、すぐに復活し一日中テンションが高くなっていた。現金な奴である。

「さぁ、行くわよ！　響、薫、努」

理沙が張り切って言う。彼女にしては意外にもテンションが高い。どうやら理沙も今日は楽しむつもりらしい。毎日勉強や訓練のため、ここしばらくは息抜きできる日がなかったのも相まって、今日の歓迎会を強行したのだ。実は一番楽しみにしていたのは彼女なのかもしれない。

「心っちと棗っちはどうするん？」

「心と棗には校門で待ち合わせって伝えてあるわ」

「わかった。待たせるのも悪いし、行くか」

理沙の答えを聞き、響は答えながら鞄を手に取る。努が叫びながら走って先に教室から出て行く光景を、呆れながら見送り、3人は教室を後にした。

「あ！　兄さんだ。棗ちゃん、兄さんたちが来たみたいだよ」

「あ、そうみたいですね」

校門で既に待っていた心と棗は響たちに気付いて駆け寄っていく。そんな2人を、響たちは手を振りながら迎え入れる。これで今日のメンツは揃ったことになる。

「理沙先輩、努先輩、こんにちは。それから……え～と……？」

駆け寄った棗は理沙と努に挨拶をし、それから初対面の薫を見て困惑する。兄の友人なのは簡単に想像できるが、まだ自己紹介していないため名前が分からないので挨拶ができないらしい。

「私の名前は橋本　薫なのですよ。心っちですね？　よろしくですよ」

それを見て察した薫は簡単に自己紹介をする。もちろん初対面の心にも愛称で呼びながら。

「心『っち』？」

自分の呼ばれ方に疑問を持った心は兄を見る。当然、心の言わんとしていることが理解できる響は、それでも苦笑し、首を左右に振る。

「諦めろ、心。こいつは誰に対してもこんな感じだ」

まるで昨日の自分を見ているようだ、と思いながら、自らの経験談を踏まえた上で心に言う。薫のこの態度は、誰に対しても同じらしい。年上に対してはどうなのだろうと、どうでもいいことが頭に浮かぶ。

「は、はぁ。よろしくお願いします。薫先輩。」

それを兄の表情から悟った心は、改めて薫に向き直り、お辞儀しながら挨拶した。そんな心の礼儀正しい態度に驚いたのか、薫は、あれっと首を傾げる。心としても、何故自分が挨拶して、そんな状態になるのか全く分かっていないらしい。お互いに首を傾げるというシュールな光景が出来上がった。

「やっぱり、響っちの話から聞いて想像してた心っちよりだいぶ違うのです」

昨日の響の話を聞いていた薫は、勝手に想像していた響の妹像と、実際の妹を見比べて口に出す。

「なんか昨日も同じ言葉を聞いたんですが、兄さんは私のことをどう説明したんですかねぇ？」

「だから、事実しか伝えとらん」

ジト目で横から見てくる心の追及を、響は軽くかわす。事実という言葉に、なぜか嫌な予感が拭えない心。兄に問いただそうと口を開きかけるが、心より早く、理沙が話を進める。

「はいはい、時間もなくなっちゃうからさっさと行くわよ。まずは買い物からね。男は荷物持ちよろしく」

理沙は、そう言って自身が先頭に立ち歩いて行く。心としては自分の沽券に関わることなので、もっと追求したかったのだが、時間がないのも事実のなので渋々と追求を諦めた。後で兄を尋問することを決定事項にする。

その後、理沙を追うような形で5人は学園を後にした。

「そうそう、心。お前、帰ったらお仕置きな」

「……はい？」

歩きながら唐突に切り出す。心も理解できないのか、呆けた表情をしている。

「くっくっく、まさか俺を抜きにして家の使用を許可するとは、心も成長したなぁ」

「ひぃ！！」

その言葉に思い当たることがあったのか、心の顔色が青ざめる。それを見て尚も楽しそうに笑う響。しかし、目だけはしっかりと心を射抜いており、それが心には、兄が本気であると気づかせる。

「そうだな……今日はアレでいこう」

「あ、アレってどれですかぁーー」

拷m……調ｋｙ……お仕置き方法を決めたらしい響。心の脳内では、今までの数々のお仕置き方法がリプレイされる。それと同時に汗がドバッと流れ出す。逃げ出したい、でも逃げたら後でもっと酷いお仕置きが待っている。そんな葛藤が頭の中で繰り広げられている。心の奥底で、ちょっと後者でもいいかな、と考えてる自分がいることに心は気づかない。完全にＭである。

「くっくっく、楽しみにしとけよ」

「いやぁぁぁぁあ」

心の叫び声が響き渡る。このやり取りを一通り見ていた他の面子は、このときの響は本当に悪魔のようだった、と口をそろえて答えたそうだ。

「ここが響の家か！？」

「うわぁ～、子供二人で住むにはちょっと大きいのですよ」

歓迎会に使う料理の買い物を終え、響の家についた６人は神楽坂兄妹を除き、みんながその家に驚いていた。焦げ茶の屋根に、見るからに新築だとわかる壁に表札。いわゆる一戸建てである。

理沙たちにしてみれば、アパートなどの一室を想像していたのだ

が、まさか一軒家だとは想定外である。高校生二人で住むには明らかに常識外れ。しかも、響たちは自己紹介の時に、引っ越してきたと言っていたのを覚えていたので、この新築物件は、二人のために建てられたことに思い当った。

「響っちたちって意外と金持ちだったの？」

二人以外が当然抱いていた疑問を、代表して薫が問う。皆の視線が兄妹に集まる。

「あ、あはははは～」

乾いた笑いを浮かべるしかできない心。響たちでさえも、この家を見た時は驚いていた。響の収入の面だけを見れば、この程度の家なら十軒だろうが二十軒だろうが余裕で建てられる。だからと言って、この魔導教会から今回の仮住まいとして支給された家は、二人で住むには大きすぎると思っていた。一高校生が持つには異常だろう。

しかし、本当のことを言う訳にもいかないので、そこは二人で苦笑しつつ適当に誤魔化しておいた。

「お邪魔しま～す！！」

玄関のドアを一番に開けた努は元気よく言った。持ち主である響たちよりも早く家に入るあたり、努の我の強さが伺える。

「うわぁ～、中も綺麗なんだね？　心ちゃん」

よく整理された玄関とその奥に見える廊下、リビングなどを見て棗が声をかけた。掃除などの家事を兄に任せっきりの心としては、なんと答えればいいのか判断に困る問いかけである。後ろから兄の忍び笑いが聞こえてくるのが無性に癇にさわる。

「とりあえず、私と努っち、棗っちで食事の準備をするべし。理沙っちは会場の準備ね。響っちと心っちは気にせずくつろいでて」

薫が指示を出す。神楽坂兄妹の歓迎会なので、二人に準備をさせるつもりはないらしい。その気遣いが分かっているので、響は頷くことで返事を返す。

「私も何か手伝いましょ「頼むからお前はくつろいでてくれ！！」む〜〜〜」

それでも手伝いを申し出ようとした心の口を塞ぎながら、響が慌てて割り込んだ。心に料理などを手伝われた日には、歓迎会が毒物混入事件へと変わりかねない。それだけは何としても阻止しようと、響も必死である。

「ふふ、いいのですよ。主賓を働かせるわけにはいかないのですよ。それじゃあ、準備を始めるです」

「おう！　響、キッチン借りるな？」

「準備ができるまでゆっくりしていてください」

薫の言葉に腕まくりをした努が続き、その後に棗が続く。

そうして歓迎会準備が開始された。

薫たちに言われたとおりに、リビングでテレビを見てくつろいでいる響。その格好は制服ではなく、既にラフな格好に着替えている。心は自分の部屋で着替えている。

視線を動かすとキッチンから明かりが漏れ、３人の声が聞こえる。３人の動きには迷いがなく、料理に手慣れているようである。ジュージューという料理独特の音が聞こえ、時折美味しそうな匂いまでも漂ってくる。それらに耐えかね、グゥっと鳴るお腹を押さえながら、テレビに視線を戻す。

テレビでは今ニュース番組をやっており、最近多発する妖魔出現について専門家が偉そうに語っている。どうやらまた被害が出てしまったらしい。魔導協会の動きが早く、死者は出なかったらしいが、それでも最近の妖魔の出現率は異常である。一度本格的に調査する必要があるかもしれない。

そんなことを考えていると、不意に視界に赤い髪の女の子が目に入ったため、響はその女の子に疑問を口にした。

「そう言えば、なんで理沙は料理担当じゃなくて会場担当なんだ？」

「べ、別にいいじゃない！　会場の準備がしたかったから志願したのよ」

突然の質問に一瞬こちらを振り向くが、すぐに顔を背けて言う。そのまま、この話題はこれで終わりだ、という雰囲気を出し作業へと戻る。その姿に、さらに疑問が増した響は、答えを模索する。

（わざわざ会場の準備を志願する人がいるだろうか？）

響は幼いころから魔導協会で働いている。そのため、その思考回

路も一般人のそれとは懸け離れている。そんな思考回路を、こんなところで発揮するのもどうかと思うが、響はさらに思考を深めていく。

（志願したのではなく、志願せざるおえなかった。となると、その理由は？）

その結果、一つの答えに辿り着く。しかし、それを正直に言ったところで、理沙は認めないだろう。ならばどうするか。さらに先を読み、理沙の反応を想定し、展開を組み立てる。そして考えを纏め終え、響が口を開いた。

「ほう、努が料理できるのもそうだが、理沙が料理できないなんて意外だな」

確信はまだ持てないが、あえて自信に満ち溢れた態度で理沙に言う。所謂、カマかけである。

「な、何言ってるのよ。料理ぐらいできるわよ。ただ、アンタに食わせるのが勿体無いと思っただけよ」

響の言葉にギクッっと一瞬肩を震わせこちらを振り返り、全力で否定する。その返答を見て、疑惑を確信に変える響。理沙の反応も想定内であり、内心でほくそ笑む。

「そうだったのか？　まぁ、わざわざ人の家で歓迎会をやると言っといて料理ができないわけないよな」

「そうよ、そんなわけないじゃない」

納得したそぶりを見せる響に、ホッとしながら作業に戻る理沙。一回引くことによって、理沙の心に安堵を促し、それを足元から崩す。思った通りの反応に大笑いしそうになりながらも、まだ耐える。

「なら今度俺に弁当作ってくれよ？」

そして響は本題に踏み切った。

「はぁ！？　何でアンタなんかのために私が弁当を作らなきゃならないのよ」

突然の話題に驚き、首が取れるんじゃないかという勢いで振り向きながら言う。

「賭けの賞品はそれにしよう。理沙の手作り弁当」

そこで響は初めて表情に笑みを浮かべながら、切り札を出し止めを刺した。

「なぁ！？」

それを今日1番の驚きで見る理沙。目を見開き、開いた口が塞がらない。まさかこんなことに賭けの商品を持ち出すとは思ってもみなかったらしい。る。

（コイツ、私が料理できないのわかってて言ってたわね）

理沙にとって料理ができないのは一種のコンプレックスのようなものだ。今まで、憧れの女性を目指し、魔導の修行に明け暮れてきた理沙は、料理などに割く時間が取れなかった。そのため今まで料

理を学ぶ機会がなかったのである。
しかし、そこは負けず嫌いな理沙である。素直にできないと言えるほど、大人でもなかった。

「どうした、理沙？」

「クゥッ！　分かったわよ作ってくればいいんでしょ！！　月曜日に持っていくわよ」

やはり乗ってしまうのだった。

「それじゃあ、皆さんグラスを持って～！！神楽坂兄妹の藤歌学園編入に～・・・かんぱ～い！！」

カチャン

その後、料理も無事に完成し、努の音頭に合わせて一斉に乾杯する。
テーブルにはフライドチキンやポテト、サラダ盛り合わせや焼きそばなど、色鮮やかな料理の数々が並んでいる。どれも美味しそうな見た目と匂いに食欲をそそられる。

「皆さん、今日は私たちのためにこのような会を開いていただきまして、ありがとうございます。ほら、兄さんも食べてバッカリいな

いで何か言ってください」

心が響に呆れ混じりに言う。

「んぐ！　だってよ、この料理うまいんだもん。自分以外が作った料理なんて久々だしよ。みんな今日はありがとな！！　このあとは家で楽しんで行ってくれ」

食べていた食べ物を飲み込んでから響が言う。

「フフ、ほめてもらえて嬉しいですよ、先輩。まだまだ沢山あるのでいっぱい食べて下さい。」

響の反応を見た棗が嬉しそうに言う。

「あ！？それ私が食べようと思ってたのに！！薫、それよこしなさい！！」

「ふっふっふ。理沙っち、こういうのは早い者勝ちと昔から決まっているです。そして勝負の世界は厳しいということも。パクッ」

理沙が手を伸ばしたフライドチキンを横からかすめ取る薫。
それを理沙が取り戻そうとするが、薫は見せびらかすように食べてしまう。

「くっ！！薫、食べ物の恨みは怖いわよ？」

意外と食い意地がはっている理沙であった。

現在の時刻は夜１０時

「おっしゃ～、そろそろ料理もなくなってきたし二次会としゃれこみますか、今日は無礼講じゃ～～～」

「おお！！わかってるねぇ、努っち。やっぱそうこなくっちゃ」

そう言って自分のカバンから日本酒を取り出す努。薫はどこから持ってきたのか缶ビールに缶チューハイをテーブルに並べていく。

「アンタらね、私たちは未成年よ？お酒はって何で注いでるのよ！？」

「固いこと言うなよ。それとも酒も飲めねぇのか？」

「それくらい飲めるわよ！！　いいじゃない！　飲みましょう。」

努の口車に乗せられ酒を口に運ぶ理沙。

「いいねぇ～。響もどうだ？」

自らも飲みながら一升瓶を響に差し出す。

「ああ、そうだな。もらおう」

「お？結構いける口か？」

実は響は七聖「獄炎」との付き合いで小さいころから酒を飲んでいるので、酒には意外と強かったりする。

薫は薫で心たちに自分の持ってきた缶チュウハイを勧めている。
そしてこのあと響はこれらの行動を止めなかった自分に深く後悔する。

１０分後・・・

「こぉら響！こっちを向きなはい。私の話を聞いてましらかぁ？？」

「ぐお！？」

強引に響の顔を両手で挟んで自分の方に向ける理沙。

「響っち？　響っち？　何で男って生き物は女性を外見で判断するんでふかぁ～」

「ちょっ！？　待て、薫！！　首はヤメロ」

首に絡みつく薫を必死でどける。

「だぁから、はなひを聞けぇ！！」

「わかったから理沙。ちょっと落ち着けー！　ぎゃぁぁぁ！！？」

そう言ってのしかかってくる理沙を説得するが、バランスが崩れ倒れてしまう。

「さっきから・・ヒック・・そう言って・・ヒック・・話を聞かないじゃないかぁ～／／」

響の上にまたがる理沙
「お前！ヤメッ！？おい、努。本はと言えばお前の責任だぞ！助けろ」
そう言って努を見る。
「いいんだ、いいんだ。俺なんてどうせ・・・」
そこには部屋の隅で丸くなっている努がいる。
その周囲だけ暗い空気が流れているのは気のせいではないのだろう。
「くっ！使えない奴だ。心は？」
そう言って反対側を向く
「棗ちゃ～ん。すりすり」
「やめて、心ちゃん。あっ！？そんなところ触っちゃダメ！！」
棗に抱きつきながら眠っている心と、抱きつかれながらも必死に抵抗する棗の姿があった。
少し危ない雰囲気が出てるので、響は眼を逸らす。
「くそ！　味方はいないか！？　こうなったら自力で抜け出すしかない。魔法を使えば・・・な！？　バインドだと！！」
「フフフフ、逃がしゃないわよ。ひ・び・き」
「そうだよ響っち。しっかりワタヒの質問に答えてもらふのれふよ」

バインドを発動して魔力のロープで響を縛り上げた2人は不吉な笑みを浮かべながら響に近づいていく。

「オイお前ら、それ以上近づくな！？　やめろよ、おい！！　いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

その後響がどうなったかは定かではない。

第１２話：星空の下で

深夜……

響の家のリビングは酷い惨状だった。
ところどころに空き缶が、一升瓶が散らばり、そこには疲れてしまったのか5人が寝てしまっていた。
ところどころ服がはだけているのには目を逸らしておく。

「ふぅ、やっと静かになったか……」

なんとか自身を守り抜き疲れ切った響がポツリと言う。
あの後は大変だった。自身に掛けられたバインドを魔力を使って無理やり解き、尚も襲いかかってくる理沙と薫から逃げ続け１０分、ついに壁際へと追いやられてしまった響は、雷撃を放ち2人を気絶させたのだった。

「明日何も覚えてるなよ」

誰に聞かせるでもなく、ぽつりと口から言葉が漏れる。覚えていた時のことを考えるとそれだけで背筋に寒気が走る。

そしておもむろに立ち上がり、庭へと続く窓を開ける。
響を外の冷気が出迎えるが、それを気にするそぶりも見せずに、縁側へ腰掛ける。

「星が綺麗だ……」

空を見上げ率直な感想を言う。空には三日月が浮かんでおり、雲が一つもなく星がよく見える。
近頃の都会ではなかなかお目にかかれないほどの星空だった。

「……」

どれくらいそうしていたのだろうか？
縁側でボーっとしていた彼の背中に、不意に声をかけられる。

「響先輩？」

声の主は棗である。いつの間にか起きだしたのか、肌蹴ていた服装をしっかりと直した格好で立っていた。

「起しちゃったかな？　棗ちゃん」

「いいえ！　少し前から起きてて、それで先輩が起きたから、どうしたのかなって……隣いいですか？」

「え？　ああ、うん。いいよ」

棗の問いかけが少し意外だったのか、少し驚きつつも承諾する響。
対する棗も遠慮がちに「失礼します」っと響の右隣に腰を降ろす。
そんな棗の姿を見て、苦笑が漏れそうになるのを堪え、再び星空を見上げる。

「星をね、見ていたんだ。」
「とても綺麗ですね？　星空。まるでどこまでも吸い込まれそう」

フフっと笑顔で言う棗。

「星空って素敵ですよね。私は昔から悩み事があると星空を見るんです。考え事していても全部吹き飛んじゃうんです。なんか、お前たちはこの空の中じゃ、ちっぽけな存在なんだぞって言われてるみたいで。変ですよね？　こう言うの」

「そんなことないよ。俺にも似た経験がある」

棗の言葉に感慨深そうに頷く。

その星空を見つめる視線も先ほどとは少し変わったように感じる。

「何か、悩み事があるんですか？」

「え！？」

棗の言葉に今度こそ驚きを隠せない響。

悩みがないわけではない。しかし、表面上は全く出していなかったと自負する分、驚きが倍増している。

「さっきの先輩の背中を見てると、どっかに消えてしまいそうで。ホントは声をかけないつもりだったんです。でも、それを見て居ても立ってもいられなくて……それで」

棗が懸命に自分の思いを言葉にする。

棗自身も何を言ったらいいのか分からないのだろう。その言葉はたどたどしく、どこかハッキリしない。

それでも響に自分の思いを必死に伝えようとしているのは伝わってくる。

それを響も分かっているのだろう。

「そっか。ありがとう。棗ちゃん」

そう言って棗の頭を撫でる。棗はくすぐったそうにしながらも、目を閉じてその手を受け入れる。

「確かに、悩み事って言えば悩みごとかな？　でも、もう答えは出てる悩み事なんだ。でもね、それを実行するのはちょっと怖い」

そう言って悲しみを宿した目をする響。どこまでも後悔し、どこまでも嘆き悲しみ、どこまでも絶望した瞳。

その瞳を見てしまっては、何も言えなくなってしまう。

「……」

「……」

お互いに無言の時間が過ぎる。

空では変わらずに星空が彼らを照らしている。

沈黙を破ったのは棗だった。

「響先輩はどうして魔導士になろうと思ったんですか？」

「魔導士になった理由か～……」

棗の言葉に、どこか困ったように考える響。

理由はある。明確な形として響の中に残っている。

しかし、それを棗に伝えてもいいのか。それが響が懸念していることだった。

なにせ、彼が魔導士になった理由は……

「私は昔ある人に助けてもらって。だからその人みたいに、助けられたらいいなと思って。私のような人を減らしたいなと思って魔導士になりました」

自身の過去を少し話す棗。

思い出すのは5年前の事件。

自分たちと変わらない年にもかかわらず、その身を危険な場所に置き人々を守る少年。

それは一種の憧れなのかもしれない。

「そっか、棗ちゃんは強いな……」

棗の理由を聞いて感心する響。棗が疑問に思い問おうとするが、その声は響によって阻まれる。

「……俺はその時、自分をそんな目にあわせた奴に対する復讐心しかなかった。……俺が魔導士になった一番の理由はね……復讐のため……なんだよ」

そう言って今にも泣きそうな顔をする響。

棗の体験を聞いて、それを自らの過去と照らし合わせているようである。

響自身、何故口からこんな言葉が出たのか分からないだろう。

先ほどまでは言うか言わないか迷っていた言葉。しかし、それが勝手に口から出て行ってしまった。

もしかしたら誰かに聞いてほしかったのかもしれない。
今まで誰にも明かしたことのない本心を一瞬とはいえ吐露してしまっていた。

棗はそんな響を見て抱きついた。

「おいおい！？　棗ちゃん？　大丈夫だよ。今はそんなこと考えてないから。理由は詳しく話せないけど、もう大丈夫だから」

そう言って説得する響。
納得したのか棗は響から離れる。その棗の顔には涙が流れていた。

「やっぱり、棗ちゃんはやさしいな」

心からそう思う響。
棗はさっきの短い言葉から、今まで響がどのような過去を送っていたのかを漠然とでも認識したのだろう。

「……」
「……」

またも静寂が訪れる。
そして、今度は響がその静寂を打ち破った。

「棗ちゃん。俺のこともこれからは「響さん」って呼んでくれないかな？」

「え？」

いきなりの響の問いかけに頭がついていかず聞き返す棗。

「だってさ、理沙や努、薫には「さん」付けなのに、俺だけ「先輩」だったろ？　この際だから俺も「さん」付けがいいなって」

その言葉に一瞬キョトンとした後、笑顔になり棗は言う。

「フフフ。はい、わかりました。響「さん」」

「ありがとう」

改めて感謝を言う響。その言葉にはいろんな気持が乗っていた。

「さて、いくら夏だからってこれ以上外にいたら風引くかも。中に戻って寝ようか。空いてる部屋は自由に使っていいから。他の奴らは朝まで放っておこう」

そう言いながら立ち上がる響。

「わかりました。響さん」

そう言って笑顔になり2人は家の中へと戻っていく。

後には空いっぱいに輝く星空が2人を見守っていた。

翌朝・・・

「お～いお前ら、いい加減に起きろ～！　もう昼になるぞ」

「う、うぁ～～」

響の声に理沙たちがもぞもぞと起きてくる。

「おはようございます、理沙ちゃん、薫さん、努さん」

「おはよ、棗。あぁぁぁ、頭が痛いよぅ」

「私もなのです」

「俺もだ」

棗のあいさつに頭を押さえながら返す3人。

「大丈夫ですか？回復魔法かけましょうか？」

「放っておけよ、棗ちゃん。そいつらは自業自得だ」

棗の心配そうな言葉に、響は昨日のことを思い出しながら言う。

「兄さん、それはあんまりじゃないですか？　理沙先輩、薫先輩、努先輩、お水をどうぞ。」

心がコップに水を入れて持ってくる。

「ありがとう、心」

「ありがとうなのですよ」

「ありがとな」

礼を言う3人。

「それより、何で心ちゃんは大丈夫なんですか、響さん？昨日はあんなに酔っぱらっていたのに。」

棗の疑問ももっともだろう。何せ心も昨日酒を飲んで棗に絡んでいたのだから。

そんな心が二日酔いにもならずに一人元気そうだ。

「心も昔にちょっとな・・・あまり追及しないでくれ。」

昔、「獄炎」に付き合い飲まされたことを思い出しながら言う響。付き合わされたのは何も響だけではなかった。

実は心も昔にかなり飲まされた経験があるのだ。

その経験によって、酒には弱いが、その後の回復力が半端なく良くなってしまったのである。

「ん？　ちょっと待てよ。何で棗ちゃんが響のことを「響さん」なんて呼んでるんだ？」

「あれ？　そう言えば昨日までは「響先輩」だったのですよ」

棗の響に対する呼び方を疑問に思った努と薫が口にする。

「ん？　ああ！　昨日の夜、お前らが寝ちまった後にちょっとな。いつまでも俺だけ先輩って呼ばれるのも何か変だろ」

「なので響さんって呼ぶことにしたんです」

響の説明に頷きながら棗が受け継ぐ。

「兄さん？　私の棗ちゃんを取ったりしたら許しませんよ？」

「え！？」

響たちの説明を聞いていた心が言い、棗が驚く。

「別に取りはしないよ。ほほぅ。心と棗ちゃんはそう言う関係だったのか。気付かなかった。棗ちゃん、心を頼むな！」

「え？　えぇぇ！？」

「よかったね、棗ちゃん。兄さんの公認も頂いたことだし、これからは堂々とラブラブできるよ」

「な、何の話をしているんですか、心ちゃん！！　響さんも乗らないで下さい～～！！」

棗の叫びが響の家に響き渡る。

そしてみんなの笑い声が巻き起こった。

こうして響と心の歓迎会は幕を閉じて行った。

第13話：初挑戦

朝・・・

「う、う～～ん……」

ぼやけた視界を手で擦りながら彼女は眼を開ける。
そして時計を確認し、普段はまだ寝ている時間であることを認識し、ベットから起き上がる。

寝ぼけた思考の中でも漠然としながら学園の制服に袖を通す。
着替えが終わるころには意識も覚醒してきて、ハッキリと物事を考えられるくらいにはなっていた。

部屋の隅に置いてある自分の身長ほどもある姿見で、制服姿の自分を映しだし身だしなみを整えていく。

2階の自分の部屋から出て階段を降り、リビングに入る。
そこには普段自分が起きた時にはもう家を出ている父と母の姿があった。

「あら？　今日は珍しく早いのね？　理沙」
「おや、本当だ。いつもは私たちが出かける時に起こさないと起きてこないのに」

リビングに入ってきた娘をみて驚きながら声をかける2人。
母の名前は明美（あけみ）、父の名前は輝義（てるよし）である。

「おはよう、父さん、母さん。今日はちょっとお弁当を作ろうと思ってね」

「あらあら、理沙がお料理なんて、それこそ珍しい。そう言えば昨日大量に食材を買ってたわね。もしかして男でもできたの？」

「何！？おい理沙。その男はきっと悪い奴だぞ！！騙されるんじゃない」

理沙の言葉に女の感を働かせる母と、それを聞いて狼狽する父。

「そんなんじゃないわよ！　ただちょっと約束しただけで、響とはそんなんじゃ……」

「聞きました、アナタ？　響ですって。それってこの前転校してきたって子じゃない？」

「お父さんは許さないぞ～～」

自ら墓穴を掘る理沙、それをネタにからかう母。父に限っては泣きだす勢いである。

母の明美のほうはそうでもないが、父の輝義は娘に対し過保護である。

昔から何かと、理沙のまわりに男の気配があるだけで、理沙に詰め寄ってくる始末である。

「もう、違うって言ってるでしょ！　ほら、さっさと行かないと仕事に遅刻しちゃうよ。今日は昨日出現した妖魔の報告書出さなきゃって言ってたじゃない」

実は、明美と輝義は魔導教会で働いている魔導士であり、明美は

「光麗（こうれい）」輝義は「豪砕（ごうさい）」の二つ名をもつ優秀な魔導士で、理沙たちの住んでいる地域を統括する魔導教会の最高責任者でもある。２人それぞれが魔導士ランクＳとかなりの実力者である。

ちなみに、二つ名を持っている魔導士のことを「名持ち」と言い、他の魔導士からは一目置かれる存在である。

「フフ、それもそうね。それじゃお母さんたちは行くけど、火の扱いには気をつけるのよ。ほらアナタ。行くわよ」

「理沙～～。いつまでも私のそばに居てくれぇ～～」

本人たち、特に父を見ていると、そうとは思えないが……

母に首を掴まれて引きずられていく父。

その姿は何とも哀れなものである。

「まったく、母さんたちは……さてと、材料は昨日買っておいたし、後はこのお料理本通りに作れば問題なしね」

言いながらも頬が緩むのを抑えられない。

なんだかんだ言いつつも、母は応援してくれるし、父の過保護も慣れてしまえば自分のことを思ってのことである。

そんな両親のことを、理沙もまた信頼しているし大好きなのであった。

昨日材料を買う時に一緒に買っておいた本を袋の中から取り出す理沙。

タイトルには「誰でも簡単、必殺手料理」と書かれている。

料理で必殺してどうするのか、っと言う突っ込みは最早言うまい。

「よし！　やりますか。まずは何を作るかね……アイツは何が好きなのかしら？」

お料理本をめくりながら考える理沙。
そしてあるページでその手を止めて、少し眺めてから勢いよく立ちあがり作業に取り掛かる。

そのページにはこう書かれていた。

「男の子ならこの料理で間違いなし！！これであの子のハートもゲット確実！！」

2時間後……

「で、できた……」

理沙の手元には1つの弁当箱が。そして水筒が握られていた。
キッチンには野菜の皮や調味料などが散らかっており、壮大なバトルがあったことがうかがえる。

「時間は……ヤバッ！？　もうこんな時間！」
時計を見て見ると、もうすぐにでも家を出なくては学校に間に合わない時間にまでなっていた。
理沙は自らの朝食を口に放り込むと、無造作に転がっていた鞄を持ち学園へと向かって行った。

ガラガラ

「はぁ、はぁ、セーフかしら。ふぅ」

時刻は始業5分前。

教室の中は談笑するクラスメートの声で一杯だった。

そんな中に扉を開けて入ってきた理沙は、荒れている息を落ち着かせながら言った。

「おお、おはよう理沙っち。理沙っちがこんな時間に登校なんて珍しいね？」

ダッシュで教室に駆け込んできた理沙を見て薫が声をかける。

「はっはっは！　どうした理沙？　俺よりも遅いなんて。寝坊でもしたか？」

すでに登校していた努が胸を張って言う。

努が理沙よりも早く登校しているのは相当に珍しい。

まぁ、遅刻していないことだけでも珍しいのだが。

「くっ！？　屈辱だわ、努なんかに言われるなんて。アンタと一緒にしないでよ！　私はちょっと用事があっただけよ」

「ふむ、用事だと言っても遅刻はしちゃいかんだろ。ギリギリで間に合ってはいるが」

屈辱から握り拳をつくって肩を震わせていた理沙に響が声をかけた。

（むかぁ～！　こいつは誰のせいだと思って……）

響の言葉に内心でイラついている理沙。

しかしその思いを声に出すまでもなく、担任の先生が入ってきたことで会話が打ち切られた。

そしてそのまま朝のホームルームが始まり各自の席へと戻って行った。

昼休み

「よし！　飯だ～、パン買ってくるぜ！！」

授業の終わりのチャイムが鳴ると同時に努がダッシュで教室を出ていく。

それに続く形で何人かの生徒がダッシュしていく。

普段はそこに理沙の姿もあるのだが、

「およ？　理沙っちは今日は購買に行かないのですか？」

チャイムが鳴ってもいつまでも教室から出ていかない理沙不思議に思い、薫が問いかける。

「うん……今日はちょっとお弁当を作ってきたんだ」

「おお！？　理沙っちがお弁当を？　何故に？」

理沙の返答に驚く薫。
それも無理もない。理沙が料理できないのは周知の事実なのである。
そのため理沙は普段から購買のパンを買って食べている
そんな理沙がお弁当を作ってきたと言うのだから、驚かないほうがおかしいだろう。
「この前言ってた響との賭けの賞品が、何故か私の手作り弁当になっちゃってね……悪いんだけど薫、今日は努と2人で食べてくれない？」
どこか恥ずかしそうに薫に事の顛末を言う理沙。
そんな理沙の様子に何かを感じ取る薫。
伊達に情報通ではない。
「ほほう！　そう言うことですか。理沙っちの愛妻弁当を食べた響っちの反応を見れないのは残念ですけど、了解したのですよ」
「愛妻じゃない！！まぁ、頼んだわよ。」
薫にお願いして自分は響の席へと向かっていく。
「理沙っちの手作り弁当……どんな出来栄えか気になるのですよ。あとで響っちにインタビューしてみよっと」
後には今日これからの予定を立てる薫がいた。

「ね、ねぇ響？」

「ん？」

薫にお願いした理沙はそのまま響の席に来ていた。
若干緊張した様子の理沙を訝しげな眼で見る響。

「こ、この前約束したお弁当……作ってきたから」

「お、まじか！？　まさかお前それで今日遅刻ギリギリだったのか？」

「そ、そうよ。……悪い？」

今日の朝の出来事を思い出し問う響に、少し機嫌を悪くした理沙が返す。

「いや、そうか。悪かったな。朝はまさかお前が俺に弁当を作って遅刻しそうになったとは考えてなかった。すまん」

そう言って素直に頭を下げる響。
まさか素直に謝られるとは思っていなかったのか、その態度に理沙は驚きながら提案する。

「ま、まぁ、別にもういいわよ。それより中庭で食べましょう」

「ん？ここじゃダメなのか？」

「ここじゃ恥ずかしいでしょ。まるで私がアンタのためにわざわざ

自主的にお弁当を作ってきたみたいじゃない！！」

「ふむ。それもそうか。それじゃ行こうか。もたもたしてると昼休みが終わっちまう」

理沙の説明に納得した響は理沙と2人で教室を出て行った。

しかし、そんな二人の姿を見たクラスメートたちが、どちらにせよ誤解したのは当然である。

2人は中庭にあるベンチに腰かけていた。

外の日差しは強いため、木の陰に隠れ、休憩するにはちょうど良いベンチだ。

周りには何組かのカップルと思われる男女が同じように弁当を食べている。

「はい」

そう言ってカバンからハンカチで包まれた弁当箱を手渡す理沙。

顔は響を見ておらず、耳のあたりが少し赤くなっている。

「ありがと。さてと中身はどうなってるのかな？」

それを受け取った響は楽しそうに弁当を包んでいるハンカチをほどいていった。

そしてハンカチがほどき終わり、弁当の蓋を開ける。

そこには、

「……」

蓋を開けるとそこには、一面白い世界が広がっていた。

「なぁ、理沙？これは料理ができない理沙に弁当を作って来いといった俺への当てつけか？　それとも本当に一生懸命作ってこれだったのか？　弁当箱いっぱいにご飯はないだろ。せめて梅干しでも乗っけて日の丸弁当にしてくれよ……」

そう、弁当箱の中には米しか入っていなかったのである。

流石の響もこれは予想外だったらしく、どうコメントすればいいのか迷っているようだ。

呆れ半分になりながらも、一応食べようかを迷っているようだ。

「そ、そんなわけないでしょ！！　ほら、これ！！」

慌てて鞄から水筒を取り出す理沙。

「ん？　水筒？　それをどうするんだ？」

さらに困惑する響。

真っ白なご飯に水筒を突然差し出されても理解などできるはずもない。

「こうするのよ」

一回差し出した水筒を再び奪い返し、水蓋を開けその中身を弁当箱の中のご飯にかける理沙。

その水筒の中からは、湯気を立てた茶色の液体上のものが出てきた。

辺りにはいい匂いが広がる。

「おう！？　これはカレーライスか！！　まさか弁当にカレーをチョイスするとは」

驚きを浮かべる響。弁当にカレーはなかなかに斬新なアイディアではないか？

「しょうがないじゃない。初心者用の本に載ってたんだから。それに男の子はカレーが好きだとも載ってたし」

必死に弁解しようとする理沙。

「いや、少し驚いたが、これはこれでありだろう。それじゃせっかくだし、いただきます。あむ・・・」

そう言って一口口に運ぶ響。

そして少し考える。

「……どう？……」

若干俯きながら、響の反応を気にする理沙。

その顔には不安の色が浮かんでいる。

一口食べて考え込んでしまった響に、理沙は不安を募らせる。

何かを言ってもらおうと再び理沙が口を開き始めた時、それを制するようにして、響が口を出した。

「ふむ。若干、野菜に火の通りが悪いな。歯ごたえがジャリジャリ言ってるぞ。あと、人参の皮は剥くものだ」

「うぅ・・・」

突然口を開いたかと思うと、考えた末に正直に料理を評価する響。その答えを聞き、さらに俯いてしまう理沙。

（やっぱ、私には料理は向かないわね・・・）

などと考える。

「あむ。モグモグ・・・だが美味しいぞ」

二口目を口に運びながら言う響。

「え！？」

その言葉に俯いていた顔をあげ、信じられないものを見る目で見る理沙。

「料理って言うのはなにも、味だけですべてが決まるものではない。もちろん、レストランなんかじゃ味が一番重要だが、こう言う弁当で重要なのは『心』だ」

理沙に言い聞かせるように言う響。

その声にはどこかやさしさが宿っている。

「『心』って・・・な、何恥ずかしいことをサラッと言ってんのよ！」

「あむ・・・だが事実だろ？　現に今日はこれを作るために遅刻ギリギリまで粘ってくれたんだし」

理沙は顔を赤くしながらも響に返答するが、響はさらにカレーを口に運びながら即答する。

「そ、それは……どうせ作るなら美味しいって言わせたいじゃない」

「そう。それだよ！　料理で一番大切なのは、美味しく食べてもらいたいって言う気持ちだ。その気持ちがあれば、きっと上達するさ。この弁当にもその気持ちがちゃんと入っている。だから俺は美味しいと感じたんだ」

観念したように今日の朝の心境を語る理沙。

それに響は感心し、理沙に返す。

「あ、ありがと／／／／　そんなこと言ってくれたのはアンタだけよ。私は料理だけは昔から苦手でね。今までもあまり作る機会がなかったし・・・」

「ふむ。それじゃぁ、俺が理沙に料理を教えてやろうか？　俺は昔から家事とかやってたから得意だぜ」

正確にはやらされていたのだが、それをここで話しても何もならないだろう。

「え！？　いや、でもそれは……」

「キッチンは俺の家のを使えばいいし、材料は割り勘な！時間が取れる時がいいから、毎週土曜日なんてどうだ？　なんだったら食材の買い物の仕方から教えてやるぜ？」

理沙の言葉を無視し、1人でどんどん話を進めていく響。
日取りまで勝手に決められた理沙は、口をはさむタイミングを完全に失い戸惑っている。

「え？　あ、え～と・・・お、お願いします？」

いつもの強気な態度がなりを潜めて、恐縮した態度を取る理沙。
なぜか語尾が疑問形であった。

「ふっ、任せろ！　これからは俺のことを師匠と呼ぶがいい」

「ちょ、調子に乗ってんじゃないっ！！」

響の態度にいつもの調子を取り戻し、肘打ちを放つ理沙。
響はとっさにそれを避ける。手に持ったカレーを少しもこぼさないあたり伊達に七聖を名乗っているわけではない。

「ほら、理沙。お前は俺の弁当でも食べろよ。早く食べないと時間がなくなるぞ？」

言いながら自分の弁当を理沙に投げる響。

それに何か言いたげながらも理沙は弁当を受け取り、蓋を開ける。
そこには色とりどりのおかずと、サンドイッチが入っていた。

「うわっ！　すごっ！！　これ本当にアンタが一人で作ったの？
……あむ。しかも美味しいし……」

その料理の見た目と味に感嘆の声を洩らす理沙。

「もちろんだ。栄養バランスから、カロリー計算まで完璧だぜ。理沙も練習すればそれくらいなら簡単に作れるようになるさ。さ、さっさと食べて教室に戻ろうぜ」

「う、うん……ねぇ、響？」

「ん？」

「ありがと／／／」

そっぽを向いて赤くなりながら言う理沙。

「はは！珍しいな。素直に礼を言うなんて。」

「うるさいわね！　もう……」

その後響と理沙は急いで弁当を食べて教室へと向かって行った。

教室に戻った二人にクラスメートからの質問の嵐が待っていることを知らずに……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2968j/

雷の覇者

2010年10月28日01時01分発行